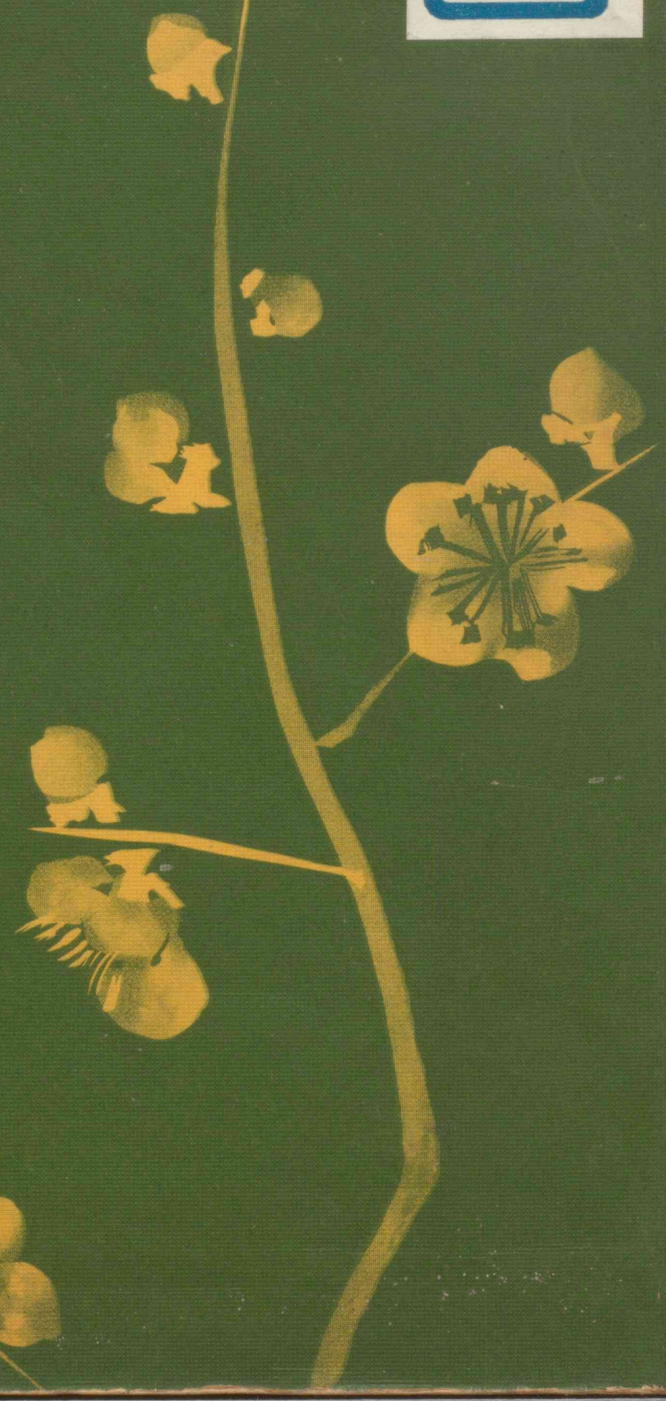
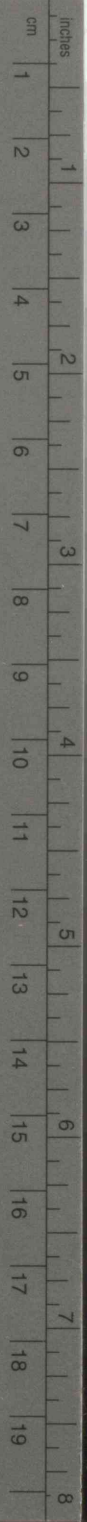


新編
國文讀本
新制版卷三

375.9
No 14
資料室



Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42545

教科書文庫

4
810
44-1933
200030
1753



資料室

375.9
Se14

日六月一十年六和昭
用科文漢語國校學中
濟定檢省部文
日六月七年八和昭
用科語國校學業實

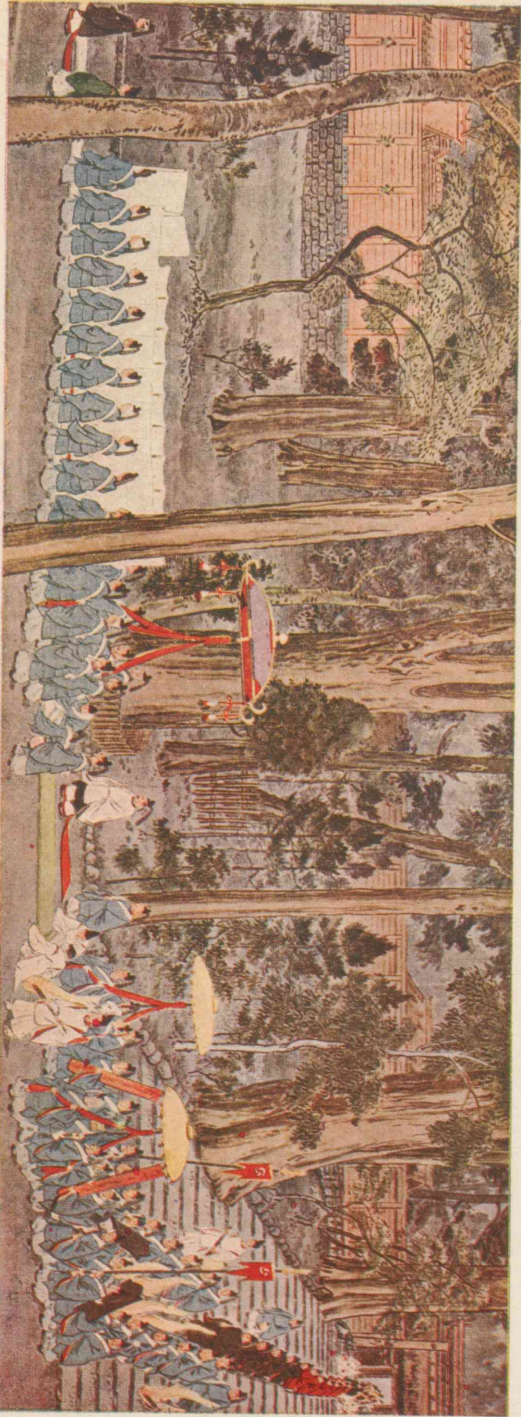
千田憲編

新編
國文讀本
新制版

東京
右文書院藏版



廣島
大學
圖書
印



第二

大皇神宮御遷の圖

新編 國文讀本 新制版 卷三

目次

一 吾人の皇室	永田秀次郎	一
二 神宮御造替の儀	〔神宮綜覽〕	五
三 チダレの舟遊	山崎直方	一〇
四 野の家族	白鳥省吾	一七
五 土の鳩	吉田絃二郎	一九
六 お遍路さん	荻原井泉水	二七
七 抵抗的生活	江原素六	三三
八 朝日子		四〇

九	英京に於ける東宮殿下	「東宮殿下御外遊記」	四二
一〇	清淨の國	大町桂月	五六
一一	國史に返れ	徳富蘇峰	六二
一二	平泉の廢都	田山花袋	六六
一三	いかのぼり		七七
一四	青葉城	大類伸	七八
一五	白鷺	五十嵐力	八六
一六	蜂	吉村冬彦	九二
一七	松阪の一夜	佐佐木信綱	一〇二
一八	大聖の義務心	穂積陳重	一〇
一九	香氣ある生活	竹越三又	一一二
二〇	藤樹先生	橘南谿	一一六

二一	高山植物の趣味	小川未明	一二五
二二	夏祭の意義	「大阪毎日新聞」	一三〇
二三	この心	鹽井雨江	一三七
二四	村の于蘭盆	尾崎喜八	一三八
二五	蜀山人の盆燈籠	饗庭篁村	一四三
二六	蚊帳	阿部次郎	一四九
二七	日本語の戀しさ	島崎藤村	一五二
二八	紫蘇の實	長塚節	一五四
二九	ターヘル・アナトミア	菊池寛	一五六
三〇	七株松	落合直文	一六三
三一	百日紅		一六九
三二	春より秋へ	徳富健次郎	一七〇

一	花月の夜	一七〇
二	梅雨の頃	一七二
三	良夜	一七三
四	秋漸く深し	一七五
三三	桃山御陵	田山花袋 一七六
三四	御詞	官報 一八一



新編國文讀本 新制版 卷三

一 吾人の皇室

永田秀次郎

永田秀次郎
兵庫縣の人、
青嵐と號す、
貴族院議員、
明治九年生。

夏
支那古代の國
の名。

「吾人の皇室」は吾人の皇室である。決して他人の皇室ではない。他所の皇室ではない。故に吾人ばかりがこれを讚美したい。吾人ばかりがこれを尊崇したい。そして他所の他人などには斷じて手をも觸れしめるものではない。指をもさゝしめるものではない。

夏*の諺に曰く、「我が王遊ばずんば、我何を以てか休まん。我が王豫あはしまずんば、我何を以てか助からん。」かくの如く

情緒

情誼

狂れる

キングジョージ
King George
ロイドジョージ
David Lloyd George

に我が王、我が王と繰返していふ所に、無限の情緒が含まれて居る。

「吾人の皇室」と吾人國民との間には、實に父子の情誼がある。その子より見たるその父は、非常に尊く且偉きものである。そして何となく威嚴があつて、狂れがたい。それにも拘らず、又非常に親しく懐かしくして、一日と雖も離れ居る事が出来ない。實に吾人八千萬同胞の精神に宿る「吾人の皇室」なるものは、最も尊嚴にして且最も親愛なるものである。

英國人は曰く、「英國に二人のジョージあり。キングジョージ及びロイドジョージこれなり。」かくの如く皇室とその

堪へ

諂諛

論難

臣僚を併稱するが如きは、我が國民性に於ては實に堪へ難き不快の言葉である。

「吾人の皇室」は尊嚴である。随つてこれを英人の如くに無雜作に他の物と比較併稱するは、吾人の感情に於て到底忍びがたき事である。吾人のこの感情は決して諂諛ではない。又理性を滅却したものでもない。實に自然の性情の流露である。何人と雖も、その父を以てこれを他人に比較し、批判指摘して論難するを忍ぶ事が出来ようか。もしかくの如き行爲を以て「直なりとなす者があつたならば、必ず孔子に叱られるであらう。吾人は「吾人の皇室」を以て最も尊嚴なりとし、これをその

天成の特性

守舊者流

父の如くに崇敬するが故に、決してこれを他の何物とも比較する事を好まない。この熱烈なる國民的愛情は實に吾人の天成の特性であつて、以て英人と異なる所以である。併しながら、吾人は又或守舊者流の如く、「吾人の皇室」の尊嚴なる方面のみを知りて、親愛なる方面を遺れ、門を鎖し、簾を垂れ、障子を閉めて、我が親愛なる父を仰ぎ見るの機無からしめるが如き事は、吾人の熱烈なる愛情の到底堪へる能はざる所である。

仰望

「吾人の皇室」は吾人の皇室である。尊嚴にして狃るべからざると共に、又親近にして離るべからざるものである。故に吾人は啻にこれを公儀の上に仰望するのみならず、吾

加へる

人國民の經濟生活、文化生活の上に、常に吾人の父に親近する事愈、深からん事を希望して止まぬのである。

吾人はこゝに大なる自尊心を以て、「吾人の皇室」を讚美するものである。何となれば、吾人八千萬同胞の自尊と光榮とは、實に「吾人の皇室」の愈、尊嚴を加へる事によりてのみ、最も簡潔に表現せらるゝものなるを確信するが故である。

「平易なる皇室論」

二 神宮御造替の儀

神宮御造替・御遷宮の制度は天武天皇の御世より始まり、持統天皇の四年に皇大神宮を、同六年に豊受大神宮を造替

遷宮

立制

し給ふ。これ立制以來第一回の御遷宮にして、昭和四年度の御遷宮は當に兩宮第五十八回の御造替なり。

數へて

式年御遷宮は、又假殿御遷宮に對しては、正遷宮と稱し、前御遷宮の年より數へて二十年目に御遷宮あらせらるゝをいふ。而して御遷宮には又月日にも定期ありて、之を式月式日と稱す。

式月式日

算法

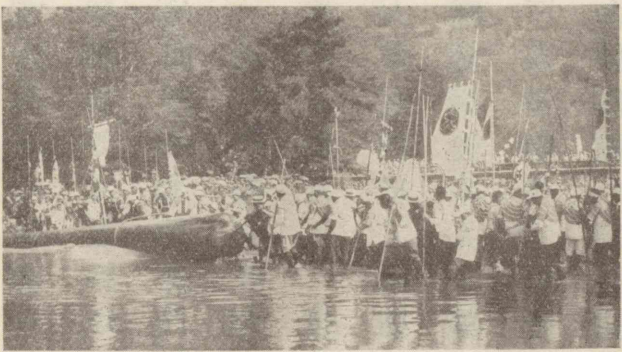
かくて、この式年の制は嚴重に王朝時代より鎌倉時代を通じて行はれ來たりしに、吉野朝の頃、後村上天皇の興國四年、前式年より二十一年目に内宮の御遷宮を行はれしより、爾來式年の算法一變して、二十一年目毎に御遷宮の例となり、以て今日に及べり。而して上古は、外宮は内宮より一年

を隔てて御遷宮あるの例なりしが、中世以後その制行はれず、天正十三年度の御遷宮に至り、兩宮同年に行はるゝ事となれり。又遷御は明治二十二年、四十二年、及び昭和四年には、内宮は十月二日、外宮は同五日を以て行はれたり。

式年御遷宮の外に、御變災等の爲に臨時に御遷宮を行はれたる事あり。豊受大神宮に於ては、この事なかりしも、皇大神宮に於ては、桓武天皇延暦十一年を始とし、高倉天皇嘉應元年、後西天皇萬治二年、靈元天皇天和三年及び明治三十三年を合せて、前後五回これを行はせられたり。この外、殿舎御修補の爲に臨時に假殿に遷御あらせられし事あり。かかる場合の假殿は新に之を建つるか、又は便宜の殿舎を

用ゐらる。

用ゐる。
算へて



御材用木曳

典を執行せらるゝ事今も古に變らず。

古昔は、前式年より算へて十七年
目より御造替の工事を始められ、そ
の年より四年目に工を竣へて御遷
宮を行はるゝ例なりしが、現今は、前
式年より十四年目に工を始め、八年
を経て落成、御遷宮を奉仕する事と
なれり。而して御造營作業の着手
より遷御に至る迄の間、それ〴〵工
程の進捗段落毎に、嚴重なる祭儀式

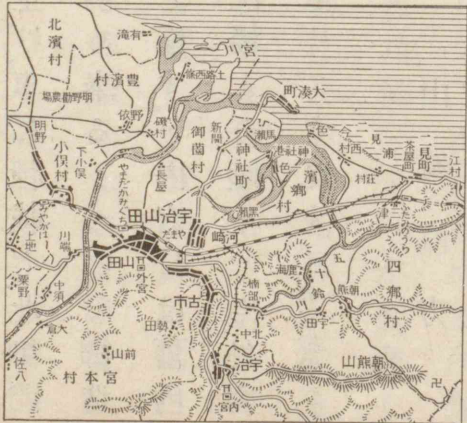
進捗

烙印

貯へ。

先づ。
整へて

山口祭・木本祭を行はれて、木曾山にて伐採せられたる御
料材は、大小幾千本各、大一の文字を烙印し、尾張國錦織繩場
より海路を運輸し、宮川尻なる大湊
の貯木場に貯へ置かる。かくて造
神宮使廳の吏員出張して、丈尺と品
等とを實檢し、内宮の分は五十鈴川
を溯りて四郷村鹿海に、外宮の分は
宮川を溯りて宇治山田市中島町に
至る。土俗之を御木分と稱す。
先づ曳上げ奉るは御樋代の御料材にて、内宮の分は四郷
村大字北中村より神宮司廳及び造營の吏員式列を整へて



修祓

積載

供奉し、大宮の御前より曳上げ、大宮司以下の神官及び造宮吏員奉迎して修祓を行ひ、東寶殿の床下に納め奉る。

外宮の分は山田の中島町より曳上げ、車に積載し、北御門口にて修祓を行ひ、西寶殿の床下に納め奉る。ついで御造替の御用材を奉曳す。俗に御木曳（おぎひき）と稱す。内宮分は舊内宮領の町村民五十鈴川を曳上げ、手洗場（てあらいば）より陸上げし、外宮分は舊外宮領の町村民、中島町より車にて奉曳す。〔神宮綜覽〕

三 チグレの舟遊

山崎直方

山崎直方
東京市の人、
地理學者、理
學博士、東京

ブエノスアイレス市滞在中、日曜日の一、日君と令夫人とに招かれて、N學士と共にチグレ河の舟遊を共にするの

樂しみを得た。

帝國大學教授
昭和四年歿、
年六十。
ブエノスアイ
レス
Buenos
Aires.
アレンテナ
(Argentina)
共和國の首
府。
チグレ
Tigre.
ラプラタ
La Plata.
パラナ
Parana.
ウルグワイ
Uruguay.
溝渠
ハナナカ
賑ひ。

南米の巨川ラプラタは、要するにハラナウルグワイの二川が作れる雙兒川である。この二川の下流相會する所、殊に本流パラナ河に沿うて廣大なる三角洲の平野が發展し、川は大小幾多の分流をなして、その間に注いでゐる。尙その上にも溝渠が縦横に穿たれて、これ等を連絡して居り、その網狀をなして走れる幾條の水路は、實にブ市々民の爲にこよなき漕舟の地となつて、休日などの賑ひときては實に一通りのことでない。

郊外電車の終點チグレの驛に車を捨てて、歩を水邊に移せば、小型の發動艇やヨットは所狭きまでに岸に繋がれて

ヨット
Yacht.

瀟洒

俱樂部
Club.

スライディング
ボート
Sliding Boat.

かひなくし

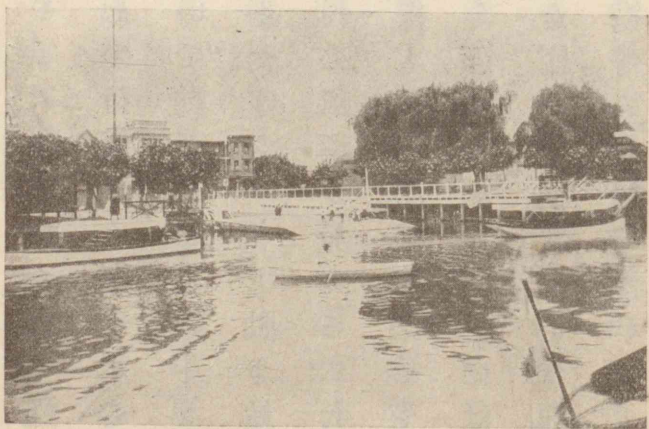
ある。瀟洒たる建築に思ひ思ひの意匠を凝せる幾棟の漕艇俱樂部は、川岸に立竝んでゐて、そしてその艇庫からは軌道の上を滑らして、輕快なるスライディングボートが陸續と水に移されてゐる。I君はその所屬の俱樂部に立寄つて、艇庫に横たはれる數十のボートの中から、意に適するものを選びて進水を命じ、N君と階上の更衣室で漕衣に着替へる。夫人も亦同じく別室に入りて、かひなくしき白の漕衣姿に更る。用意整つて艇に移れば、I君N君先づ權を執り、夫人は舵手の役を承る。艇は心地よく水面を滑つて、次第に上流に進むのである。

水郷の景色は實に筆に盡し難い趣がある。川邊に立て

添へ。

平蕪

る一むら二むらの柳の糸の靜かに垂れて春の陽にかすめる、その間を分けて注げるさゝやかな支流には、半ば朽ちたる眼鏡橋が高く懸つてゐて、その下に横たはれる捨小舟は鷺の群の占領に任せてある。若しその背景に一基の磚塔（梵字の塔）でも添へたならば、その風趣は擬ふことなき姑蘇城外の平蕪そのまゝである。水の色までそれに似て黄色に濁りたるなど、たゞその感を深くするばかりである。



河レグチ

ポプラ
Poplar.
聳えて

漣波
えもいはれぬ

唱ひ

ハンモック
Hammock.

臥榻

ピクニック
Picnic.

柳の林しばしとだえたる頃、ポプラの竝木之に代り、亭々として川を挟んで高く聳えてゐる。川幅は漸く狭く、竝木の高さより小さくなつてくる。その行儀よく影を水心に投じて、影と形と垂直の對照を畫いて動かぬ靜寂の中を、漕行く艇の送れる漣波に揺られて、またゆるくと動き始める。その影の曲線美にえもいはれぬ風情が見える。行きかふ數多の小舟には、一家團樂の樂しみを載せて來るもあれば、士女が青春の歌を唱ひながら行くもある。中には艇を岸に繋いで、用意のハンモックを樹から樹に渡し、半日の臥榻に代へてゐるものもあれば、携帯の食籠を開いてピクニックの快を味はつてゐるもある。すべての景色がいつ

テームス
Thames.

織手

旗亭

ベランダ
Veranda.

マカロニ
Macaroni.

チーズ
Cheese.

か變つてテームスの上流あたりを溯るの心地がしてくる。幾度か交つて漕ぎゆくI夫人の手竝は中々鮮かである。幾年振りかに握りたる僕の權は、とてもその織手に及ぶところでない。稍漕疲れたる頃、艇を川岸の旗亭に寄せて午餐を取る。白薔薇の咲誇れるベランダに席を設け、肉羹にて煮たる餛飩に乾酪の粉ふりかけて食ふときは、渾然として又もとのアルヘンチナ氣分に還つてくる。午後は更に支流をたどつて漕ぎつゞける。川幅は愈々狭くなる。權を十分に張ることが出來ない、やゝもすればその端が岸の叢に觸れる。そのたび毎に何ともいへぬ芳しい花の薫が傳はつてくる。見れば名は知らねど茉莉花に

迂餘曲折

似たる白い花が一面に咲亂れてゐる。水路は迂餘曲折を極めて、乍ちにして狭く乍ちにして廣く、舟行窮まるが如くにして又際まりなく、再びとある巨流に出る。こゝは舟の往來も賑やかである。時には大型の發動機船が波を蹴立てて、傍若無人の姿で行過ぎるのもあれば、三角帆に十二分の晩風を孕ませたヨットが、斜に船體を傾けつゝ、下流から馳つてくるのもある。岸邊には富豪の別墅と見えるものも少なくない。半ば傾きたる高樓のそのまゝに柵を繞らして保存してあるのは、前大統領幽棲の跡であるといふ。この國の名花薔薇の花は、これ等の庭園にも、蟹が伏屋の垣根にも、かけ隔てなく今を盛りと咲匂うてゐて美しきこと

傍若無人

別墅

幽棲

匂うて

即興

イスラウローラ

Isla Flora.

イスパニヤ語

「花の島」の意。

忙殺

限りない。薔薇のみか今はすべて春の花盛りである。I 夫人の即興に、
*イスラ フローラ 春の風吹きこてまりの、
花こぼれ散る イスラ フローラ
と口吟みたるはこのあたりの風情である。
やがて艇を回して艇庫へ歸つて來たときは、丁度夕潮のさし來る頃であつて、何處の俱樂部でも艇の收容に忙殺されてゐた。
「西洋又南洋」

四野の家族

白鳥省吾

春の日はうらゝかに、

白鳥省吾
宮城縣の人、
詩人、明治二
十三年生。

麥五六寸、
空に雲雀、

かすかに萬物の汗ばむころ、

平野の畑中道を荷馬車がゆく。

がたごとと車輪は音たて、

少しばかり埃あげてゆく荷馬車の、

米俵いくつか積む傍に、

たくましき妻は胸もあらはに乳呑兒を抱いて乗り、

強健なる夫は先だちて馬を御してゆく。

あらはに
御す

お、途上の一家族よ。
みんなで春の日にやけ、
みんなで微風に吹かれる。
唄もなく野をゆく、
この一家族に幸あれ。

「日本詩集」

五 土の鳩

吉田絃二郎

私は二三日前、とげぬき地藏の前を歩いてゐた。

竹で編まれた小さな花籠を、山門の前で賣つてゐる男が

あつた。

私は三十年前の自分をそこに見出した。

吉田絃二郎
本名源次郎、
佐賀縣の人、
文學者、早稲
田大學講師、
明治十九年生
とげぬき地藏
東京市外巢鴨
町にあり。

市松模様
江戸時代に伊
優佐野川市松
の着るよ
りこの名あ
り。

竹で編まれた花籠。紫や青や赤の市松模様に染められ
た花籠。

やう
不可思議

私はあの花籠をどんなにか欲しがつたであらう。
削り立ての竹は銀のやうに春の光にかゝやいてゐた。
削り立ての竹は、幼い子供の心に遠い世界を夢みさせる
不可思議な香を、春の風に漂はせてゐた。

麥畑に働いてゐた母にせがんで、私は幾度花籠を買つて
貰つただらう。人生のすべての幸福が、春のすべての光が、
あの小さな花籠に盛られてあつた。

櫛土手はじの下で、いつも赤い股引をはいてゐた大きな男の
栗毛の馬が死んだ時、土手の下で火を焚いて人々は馬を取

圍んでゐた。

蠶豆の花が咲いてゐた。

人々は蠶豆畑の傍に馬を埋めた。

私は花籠を抱へたまゝ、馬のお葬とむらひを見てゐた。

貧乏な家の子供として、私は垢染かぢみた襪はきを着てゐた。

幼心にも母がいつも金の工面に涙ぐんでゐるのを感じ
たこともあつた。

しかし、あの頃は一番幸福であつたやうに思ふ。

只一つの花籠に人生のすべての幸福が盛られてあつた。

またあの頃よく鉋屑かたがしで作つたチャルメラチャルメラを買つてもら
つたことを覚えてゐる。

チャルメラ
Charamele.
ポルトガル語
唐人笛。
覚えて

抱へた
襪

あらう

黙々

滅多

春の音といふ音が、あの赤く青く染めたチャルメラの中から流れて来るやうに思はれた。

菜畑の間を、濠に沿うてどんなにチャルメラ賣りの男の

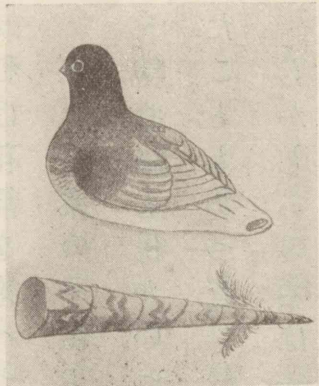
後を追つかけて歩いた事であらう。

父は怒る時は私をひどく叱りつ

けもしたが、機嫌のいい時はよく肩

馬に乗せて、チャルメラを買つてく

れた。



鳩の土とラメルヤチ

私がチャルメラを吹く時、母はよく黙々として菜畑で働いてゐた。

春の風が吹いても、滅多に母は笑はなかつた。

しかし、世界中で私は母が一番好きだつた。

私の故郷ではどこの町に行つても、土で拵へた鳩を葭簞

張りの店で賣つてゐた。

赭い土で作られた素焼の鳩は、白い胡粉や

単調な紅色の繪の具で塗られてあつた。

春の目を浴びた土の鳩は、雨戸を横にして

作られた臺の上に、きよとんとしたかはい、

眼を睜つてゐた。尻尾の方に唇をあてて吹

けば、ほう／＼と山鳩の聲をして鳴いた。

伊太利のオカリナといふ陶土の笛の音を聞いたことが

ある。その形が鶯鳥に似たところからこの名が出たと辭

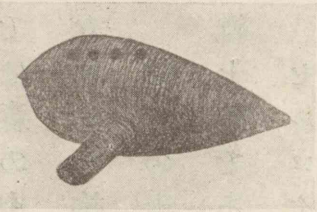
私の故郷

佐賀縣神埼郡

西郷村。

拵へた

かはい、



オカリナ

オカリナ

Ocarina.

オカリナ

野趣

牧歌的

郷土的

セルロイド
Celluloid.

書に書いてあるが、幾つかの歌口もついてゐるし、私の故郷の土の鳩よりは幾分進んだ玩具であるが、私の故郷の鳩と、其の野趣に於て、單調さに於て頗る似通つてゐる。伊太利では森の中で牧童たちが吹くといふことである。牧歌的な感じを抱かせるものである。故郷の土の鳩も其の單調な聲、其の單調な形に於て頗る郷土的であり、牧歌的である。

セルロイド*やいろ／＼な進歩した玩具が、田舎の町の店頭にも飾られて來るので、このごろは土の鳩はだん／＼少なくなつてしまつた。

私は春の田舎町で吹いた土の鳩の音を愛する。

よみがへつて

あの胡粉で塗られた翅を愛する。

ほう／＼と土の鳩を吹けば、筑紫の春がよみがへつて來る。筑紫の春の風が、春の光が、少年の日が。

伊太利の田舎の子供らは、春が來ればあのオカリナを吹いてゐるであらう。

筑紫の麥畑の中では、今も子供らはあの土の鳩を吹いてゐるであらう。

春の風が吹けば、私は筑紫を思ふ。

花籠を思ふ。チャルメラを思ふ。土の鳩を思ふ。

私はほう／＼と土の鳩を吹いてゐた時、黙々として麥の畑に働いてゐた母を思ふ。

筑紫の春を今日この刹那に歩いて見たら、きつとあの黄金の菜の花の平野に——全く南國の菜の花はかがやいてゐるが——あの限りのない麥の平野に、春の微風が吹いてゐるであらう。昔のまゝの私が、襤褸の着物を着て、げんげ畑の傍で土の鳩を吹いてゐるのを見出すであらう。麥の畑で、私の母が黙々として働いてゐるのを見出すであらう。三十年前の母と私は、今日もあの筑紫の野に寂しい眼を瞠つて春の光を浴びてゐるであらう。

瞠つて

私は故郷のげんげ畑で土の鳩を吹くであらう。亡くなつた母は、あの麥畑で、黙々として働きながら、私の鳩の聲を聴いてゐるであらう。

「木に凭りて」

六 お遍路さん

萩原井泉水

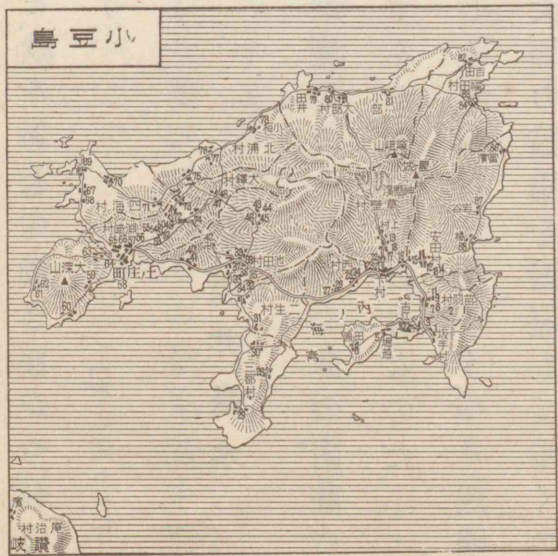
りんく〜といふさえた音が、遙かの山裾から此の山莊＊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。「お遍路さん」とは何といふ親しみ深い言葉だらう。——四國八十八箇所に残された弘法＊大師の靈場を遍歴して歩くのが、お遍路さんである。併し、いかに信仰の爲とはいへ、四國を一巡することは、日

萩原井泉水
名は藤吉、東京市の人、俳人、明治十七年生。
山莊
作者が滞在したる讃岐、小豆島の知人の別荘。
聞える
弘法大師
僧空海、讃岐

國の人、眞言宗の開祖、承和二年寂、年六十二。
遍歴
靈場

土庄港
小豆島西岸の
發足

數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として大抵のことではないので、四國の代りにこの小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積みうることにとされて居る。「島四國」といふ言葉も出來て居る。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふことである。多くは岡山から若しくは高松から來るお遍路さんは、船で土庄港（土のしや）に着く。其處から發足して、第何番と



- 1 仙 鈴 寺
- 2 不 動 堂
- 3 觀 音 寺
- 4 古 江 庵
- 5 堀 越 庵
- 6 田 浦 庵
- 7 向 王 院
- 8 醫 王 堂
- 9 庚 申 堂
- 10 西 照 堂
- 11 觀 音 堂
- 12 岡 光 坊
- 13 榮 藏 堂
- 14 地 藏 堂
- 15 大 師 堂
- 16 極 樂 寺
- 17 一 の 谷 庵
- 18 石 門 洞
- 19 木 下 庵
- 20 佛 瀧 庵
- 21 清 見 寺
- 22 峰 之 山 庵
- 23 東 光 寺
- 24 安 養 寺
- 25 哲 願 寺
- 26 阿 彌 陀 寺

いふ札所の順に參拜の路を辿るのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、寂しいのは一人二人、多いのは何十人の團體をなして、銀のやうな海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道を辿つて行く。それは繪である、美しいことである。この山莊にまで聞えるりん／＼といふさえた鈴の音は、彼等の先達が振つて居るものと見える。
お遍路さんは時を限らないが、風も日もものどかに、路を歩くのに好い氣持であり、又農事も比較的ひまな四月頃に一番多く見受けるといふことだ。この頃島に着く船は、日に

88 87 86 85 84 83 82
楠海當本雲福吉
靈庭濱地海田
庵庵庵堂寺庵

讚仰
欺瞞
ぐらる。

暗示
たとひ。

か。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてだけ美しいのではない、彼等が愛しあひ信じあふことに生きるが故に美しいのである。

そして、このことは獨り彼等お遍路さんの上のことだけではない。私達は皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならない物を負うて、自分の名前を書いた札を撒きちらしながら、自分自分の道を遍歴して居るのである。而も私達の周囲にはこのお遍路さんに見るやうな信賴と扶助とが行はれて居るだらうか。——私は思ふ、私達はこれのお遍路さんに學ばねばならない。遍路といふ行事を残した弘法大師の暗示を感じなければならぬ。そして、たとひ人

間の悉くがお遍路さんの心を心とするまでに到らなくとも、私達は先づお遍路さんの信と愛とを以て人生を歩きたいものである。

—「山水巡禮」—

七 抵抗的生活

江原素六

白沙青松の海岸に立つて、彼の赤銅色の漁夫を見る時、誰か彼等の身體の發育に驚かない者があらう。彼等は炎熱焼くが如き夏の日も、或は嚴寒肌に徹する冬の日も、決して休むやうな事はない。而して一挺の艀を操り、板子一枚に自分の運命を任せて、大海を乘廻して居るのである。彼等の生活は實に大自然との抵抗、大自然との戦である。荒波

江原素六
東京市の人、
教育家、大正
十一年歿、年
八十一。

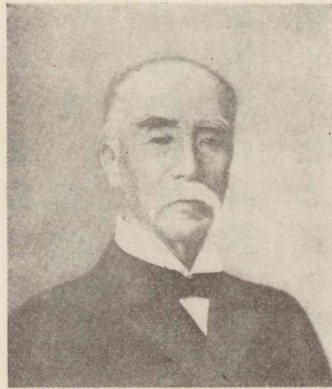
沛然
豪雨

しまふ。

怒濤

丈夫さう

が山より高く押寄せる時も、或は沛然たる豪雨の降りしき
る時も、彼等は眞劍にそれと戦はなければ、海底の藻屑とな
つてしまふのである。命の惜しいのは人の常情である。



江原素六

慣れて居るといつても、同じく人間
である。漁夫も海上の怒濤・豪雨は
恐ろしいのである。けれども、是に
抵抗し、是に打克つて常に生活して
ゐるのである。而して彼等が一度
波浪に敗れた時は、即ち彼等の生の終局であらねばならぬ
のである。

我等は又人力車夫の體軀の如何にも丈夫さうに見える

抵抗的
征服的

疾驅

困厄

のに驚くことがあるが、彼等の生活も亦漁夫の如く、すべて
が抵抗的・征服的である。彼等は焼け土の臭を嗅ぐにさへ
苦しい夏の眞晝中も、北風のひゆうひゆう吹荒ぶ冬の夜更
けにも、十四五貫以上の重い人間を載せて疾驅しなければ
ならぬ。彼等は此の勞作を續けなければ、一家は饑に迫る
のである。彼等は遊んで居られないのである。より多く
驅ける者は優勝者で、優勝者たるには眞劍に驅けなければ
ならぬのである。車夫は實に驅けることによつて自己の
身體を鍛錬し、又困厄から脱出し得るのであつて、彼等は風
雨寒暑と戦つて、常に之を征服して行く。自然の中に没入
して揉まれながら、何時も其の自然に打克つのである。

軟弱

此の車夫や漁夫の生活は到底甘い物を食ひ、良い着物を着、美しい家に住みたがる連中に眞似の出来るものでない。勿論華美を好むやうな不心得千萬な人達は、決して右のやうな生活を望まない。望まないだけに、彼等の身體は軟弱である。如何にも病人らしくて、肉體の眞の美なるものを認める事が出来ぬ。

鍊磨

又彼の角力取の生活は悉く以て抵抗的生活である。彼等は拔群な體軀を有してゐながら、尙己れに勝れる者につつかつて、鍊磨をする。これが爲に其の肉體は自然巖の如くに頑丈となつて、彼等には襯衣や股引をはいて寒がつてゐるやうなものは一人もない。其の他柔道家や擊劍家



(筆造三田和)

の體軀は、皆立派であるが、此等の人は常に鍛鍊を怠ることなく、絶えず抵抗し、絶えず打克つ生活をしてゐるからである。

又非常に長壽を保つのは百姓をしてゐる人で、一年中朝から晩まで、一挺の鋏と一挺の鎌を手にして働いてゐる人である。東京の人たちなら、直ちに病院へ驅込んで治療してもらふやうな切傷でも出来たとする。彼等はそんな時にも古手拭できりくくと繃帯して我慢してしまふ。所が其の傷が奇妙になほる。よく黴菌がはひらないものだ、實に奇蹟の如くに感ずるが、それは奇蹟でも何でもない、彼等は絶えず抵抗的の生活をしてゐるので、少し位の傷に

なほる

奇蹟

對しては、十分抵抗するだけの體力と信念とを有してゐるのである。

それならば百姓・漁夫・人力車夫などからは、肺病や胃病の患者は出ないだらうと言ふ者があるかも知れぬ。然し日本全國狭いといつても廣く、百姓でも、角力取でも病氣には冒されもする。けれども、此等は概ね平素惰けてゐる者で、日常抵抗的生活をしない結果、病に負けてしまふのである。かう述べて來ると、飽食暖衣の人たちには、體軀の美しさといふものは先づないことがわからう。のらりくらりと遊び暮してゐる人たちは、皆朧月夜の柳の下へ出るやうな連中ばかりである。苧殻のやうな手、蚊とんぼのやうな脛

か
う
飽食暖衣

では、到底長生は望むべからざることでおまけにこんな人たちには、怖るべき肺病患者が多いのである。

遊んで暮して行ける人は、かなりうまい物を食つてゐる。冬は軽く暖く、夏は涼しい物を身に纏ひ、住居には寒暑に適するやうな結構な座敷がある。かういふ生活をする人は多くは不幸で、十分に滋養分を攝取することも出來ず、又寒暑に對する抵抗力をも失つてゐる。天の配劑は眞に奇妙である。滋養物に高い金を拂ふ人は多く虚弱であつて、まづい物をたべて働く人、即ち抵抗的生活をしてゐる人には、殺しても死なないやうな強健な人の多いのは、實に面白い現象だといはなければならぬ。

纏ひ。

攝取

配劑

努力主義
奮闘主義

稱へる

漁夫や車夫や角力取や百姓などの生活は、悉く努力主義である、奮闘主義である、抵抗的である、征服的である。かうした生活には、肺病も胃病も喰ひこめないのである。奮闘なるかな、努力なるかなである。此の奮闘努力を續ける人を我等は強者と呼び、其の抵抗的の生活をする者を生活上の強者と稱へるのである。

「急がば廻れ」

八 朝日子

齋藤 茂吉

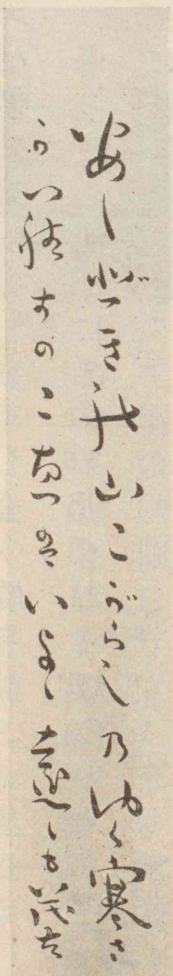
ゆらくと朝日子あかくひんがしの海にうま
れてるたりけるかも

齋藤 茂吉
山形縣の人、
醫學博士、歌
人、明治十五
年生。

あしびきの山
こがらしのゆ
く寒さからす
のこゑはいよ
よ遠しも
茂吉

中村 憲吉
廣島縣の人、
歌人、明治二
十二年生。
目ぢかし

春雨は降りてかそけしこの夜半に家のかひ馬
の目ざむる音す
雨あとのいちこの花の幽かにて咲けるを見れ
ば心なごむも



蹟筆吉茂藤齋

晝の野にこもりて鳴ける青蛙ほがらに通るこ
ゑのさびしさ

「あらたま」

中村 憲吉

雨あとの山は目ぢかしこのあした芽をととの

へし樹々に驚く
 春雨の山寺の庭に鶯をき、靜かなる朝の茶を
 飲みてあり
 春のあめ潮ののぼる河岸ごとにこの街の柳み
 な芽をひらく
 曇り夜の池はにほひて近くあり灯のとく岸
 に蛙の鳴くも

「しがらみ」

九 英京に於ける東宮殿下

五月
 大正十年。
 皇太子殿下
 今上天皇。
 鹵簿

五月十一日、水曜、晴。我が皇太子殿下には午前十一時御
 出門、陸軍御正装で、英國皇太子殿下と御同乗、公式鹵簿を以

ロンドン

London.

バッキンガム

Bucking-

ham.

ギルドホール

Guild Hall.

ロンドン市

の公會堂。

佇立

緊張味



殿宮ムガンキッパ

てロンドン市役所の歓迎會に台臨になつた。閑院宮殿下
 を始め供奉員一同も隨伴した。バッキンガム王宮から會場たるギルドホールに至る里餘の間、市民は山をなして道の兩側に佇立し、その歓迎は御入京の時に比して更に一層熱烈を加へ、殿下は全く御答禮にお違のない有様であつた。

抑、この市役所の歓迎會ほど、在留邦人及び供奉員の心に、深刻な、強烈な緊張味を與へたものは、御外遊中他になかつた。實にこの日こそ我が東宮殿下が

環視

始めて英國民環視の中心とならせられる日であり、又殿下としては御生涯の中に今日始めて、一千名に近い外國知名の士の面前で、殊に歴史的由緒ある公會堂たるギルドホールで、歡迎の辭を御受けになる日である。在留日本人の一人は、その前日著者に向つて、東宮殿下はギルドホールで十分その御大任を御遂行になつて下さればよいが。」と、頗る心配氣にもらしたのであつた。この言葉は殿下に對して誠に失禮なやうではあるが、しかし我々の尊愛措かざる東宮殿下が、しかも九重の雲の奥深く生ひたち給ひ、御年漸く二十に渡らせられる殿下が、今まで全く御經驗のない晴の場所たるこのギルドホールに御立ちになる前に、誰かその御

尊愛

生ひたち

憂慮

演説について、將又御態度について、憂慮なしに考へ得られよう。恐れ多いことながら、假に殿下の御音聲がお低くあつて、ホール全體に通らなかつたとせよ、假にその御態度がいつになく御落ちつきがなかつたとせよ、假に御聲が顫へたとせよ、私ども御側近く奉仕する者はそんなことは有りえない事と信じてはゐるもの、なほ多少の興奮を禁じ得なかつたのである。まして殿下の御性格を十分に存じ上げず、又御親しみ申し上げる機會が甚だ少なかつたこの在留民の某氏が、自然にもらした言葉は、恐らく日本國民一般の憂慮であつたに相違ない。しかも、この感情は何も對國的に、又は政策的に考へて、殿下の御態度を心配するのでは

政策的

本然の叫

ない。たゞ「我等の殿下が、どうぞ立派におやり下さればいいが。」といふ、心の奥底からこみ上げて来る本然の叫であつたのだ。

この日は最も改まつた公式の歓迎會である。古色を帯びた公會堂には、隙間もなく來會者が着席してゐた。

殿下が御入堂になると、「君が代」が奏せられ、會衆は一齊に起立して殿下を奉迎した。

殿下は市長の御案内で、供奉員一同を随へさせられ、會衆敬禮の間を静々と御通過になり、數段高い演壇上に設けられた御席に御着きになつた。

市長夫妻その他吏員の大禮服の古風なさまは、連綿たる

憧れ

歴史の頁を貫いて今日に至つたものであるといふ、羨ましいほどの憧れを感じさせた。

貴賓

御席は演壇上の前端に一つ離れて設けられ、その後には市長夫妻の椅子があり、更にその後には英國側の皇族貴賓の席と、日本側の高官及び供奉員の席が置かれた。

私語

御件の者が殿下に御續きして所定の座席に着くと、會衆は漸く腰を下した。さすがに大國民である。私語するものもなく、齊しく靜肅に殿下を見上げてゐる。實に一種いふべからざる崇敬さを覺えた。

儼然

殿下はたゞ御一人孤立した御席に、頗る御沈着な御態度で、儼然御椅子に御倚りになつてゐる。私どもはこの時何

ともいへぬ嬉しさを感じた。「あゝ御立派な御態度だ」と感歎すると共に、我に歸つて在留日本人の會衆の一團を見た時、皆緊張した氣分を漲らして、殿下の英姿を御見上げ申してゐた。

やがて市長は恭しく殿下の御前に進んで、次の歓迎文を朗讀した。

謹ンデ日本皇太子殿下ニ言上ス。

ロンドン市長、市參事會員及ビ市會議員ハ、ロンドン市會ヲ召集シ、我ガ皇帝ノ忠實ナル同盟國タル日本皇太子陛下ノ聖慮ニヨリ、殿下ガ遙々我ガ國へ御來遊アラセラレタル、コノ光榮アル機會ニ於テ、ロンドン市民ヲ

聖慮

赫々

代表シ、欣喜シテ殿下歓迎ノ誠意ヲ表シ、併セテ日本皇太子陛下ガ大戰中、陸ニ、海ニ、同盟及ビ聯合諸國ニ與ヘラレタル援助ヲ深ク感謝ス。

吾人ハ齊シク雄壯ナル貴國陸海軍ノ赫々タル武勳ニ對シ、我ガ全國民ノ感ズル賞讚ノ意ヲ表明スルノ機會ヲ得タルコトヲ欣ブ。

鞏固

殿下今回ノ御來遊ガ愉快ニシテ且有益ナルト共ニ、貴我兩國間ニ現在スル友情ヲ益、鞏固ナラシムルノ力アルベキヲ信ズ。

聲譽

終ニ臨ミ、ロンドン市民ハ偉大ニシテ聲譽高キ貴國民ヲ景慕シ、コ、ニ日本帝國及ビ開闢以來連綿タル貴

景慕

會釋

皇室ノ隆昌盛運ヲ奉祝スルノ誠意ヲ表ス。



下殿宮東るけ於にルーホ=ドルギ

殿下は御椅子より御立ち遊ばされて、演壇の前端にまで御進みになり、徐ろに會衆一同に御目を御配りになり、軽く御會釋の後、まづ陸軍の前立ある御正帽を左腋下に挟み、陸軍正規の鹿の革の厚い御手袋を左手に御穿ちになつたまゝ、御答辭の草稿の巻紙を御開きになつた。然るに、用紙が厚い爲、御開

撚

音吐朗々
諧調
抑揚

きになると、一回、二回とまで紙の撚が舊に戻つて、甚だしく御面倒のやうに拜せられた。私どもはこれを拜して、腋下に御帽子を御挟みになつて御出でだけに、さぞ御扱ひにくいことであらうと、胸を轟かせながら見上げてゐたが、殿下は益々御落ちつきになり、二回、三回とよくその紙を御ひき延べ遊ばして、實に音吐朗々と、しかも諧調のある抑揚を以て御演説になつた。その間、滿場は眞に水を打つたやうな靜肅で、會衆は酔ふが如く殿下の響き渡る御聲を伺つたのであつた。御演説が濟むと、待ちかまへてゐた會衆は一齊に拍手して、暫くは鳴りも已まなかつたのである。あゝ、この時の印象といふものは、眞に私どもが一生忘れ

限定的
説明的

ることの出来ないものであらう。感激と名づけるさへ餘りに限定的に、餘りに説明的になる虞がある。たゞ名づけやうのない涙が、知らず識らず泉のやうに眼底に湧くのを覺えた。會衆の日本人の群はと見返れば、皆喜悅の笑顔といふよりは、寧ろ感謝の念にすべてを包まれたといふやうな顔付をしてゐた。

著者は後で、彼の那須與市が、源平屋島の戦に敵の舟に掲げた日の丸の扇を射る爲に、靜々と馬を波間に乗入れて、將に矢を番へて放たうとするその刹那の味方の心持、さては首尾よく扇を射貫いた時の味方の心持は、我が東宮殿下の御答辭案を御手にして御起ちになつてから、御終了になる

番へて
放たう

までの我々日本人の心持であつたらうと、恐れ多い事ながら、ふと胸に感じたのであつた。

東宮殿下の御答辭の大意は次の如くであつた。

ロンドン市長及ビ自治體ノ諸君。

歡待

予ハコノ大都市ノ市民ヨリ受ケタル歡待ニ對シ感

歴史的建物

激ニ堪ヘズ。深キ感謝ノ念ヲ以テコノ歴史的建物ノ

内ニ立ツ。予ハ深厚ナル感謝ヲ以テ、貴下ガ市民ノ名

ヲ以テ予ニ與ヘラレタル歡迎ノ辭ヲ領セリ。

予ハ同盟國トシテ、同一ノ目的ノ爲ニ、トモニ戰ヘル

莊重

有事ノ日ヲ莊重ナル感情ヲ以テ回想ス。

予ハ今ヤ戰爭ノ終了ヲ告ゲタルヲ喜ブモ、吾人ノ責

酬ゆ。

友誼

任ハナホ重大ナルヲ知ル。蓋シ、平和ト正義トノ統治
 ヲ永久ニ建設センガ爲ニ、注ゲル數萬同胞ノ血ニ酬ユ
 ベキハ、全然吾人生存者ノ義務ナレバナリ。
 コノ行、予ガ始メテノ外遊ニシテ、過去二十年間吾人
 ノ誠實ナル同盟國トシテ、將又ソノ友誼ニオイテハ、東
 洋ノ平和ヲ鞏固ナラシムル大業ヲナスニ、決シテ缺ク
 ルトコロナカリシ大國民ヲ始メテ訪問スルハ、予ノ眞
 ニ欣快トスルトコロナリ。
 諸君。終ニ臨ンデ、宏大ニシテ且名聲アルロンドン
 市ノ爲ニ、常ニ繁榮ト幸福トヲ茲ニ表明スルコトヲ予
 ニ許セ。

林大使

名は權助、福
島縣の人、萬
延元年生。

マンシヨニ

ハウス

Mansion

House.

英國皇太子殿

下

Prince of

Wales.

ヨーク親王殿

下

Duke of

York.

皇太子殿下御

外遊記

伯爵二荒芳

徳、澤田節藏

謹著、大正十

三年發行。

林駐英大使はこれを英譯して朗讀した。
 式が終つて、殿下には式場から程近い市長公邸なるマン
 シヨニハウスに於ける、市長主催の午餐會に列せられ、こ
 ども一場の御挨拶の御交換があつた。列席者は我が兩殿
 下、英國皇太子殿下、英國第二皇子ヨーク親王殿下、内閣々員、
 市の高級吏員及び我が供奉員一同、その他日英の知名の人
 人を合せて、約三百名を算した。
 この席上に於て相會した日本人は、相識るものも、相識ら
 ざるものも、一樣に今日の殿下の御演説の御成功を心から
 祝し合つたのであつた。

「皇太子殿下御外遊記」

一〇 清淨の國

大町桂月

大町桂月
名は芳衛、高
知縣の人、國
文學者、大正
十四年歿、年
五十七。

我が國の特質は少なからざれども、特質中の特質とも云ふべきは、清淨の國なることなり。日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心清淨なり。その衣、その食、その家清淨なり。その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざるものは到底日本を解するを得ざるなり。

本居宣長

伊勢國松阪の人、國學者、享和元年歿、年七十二。すがくし

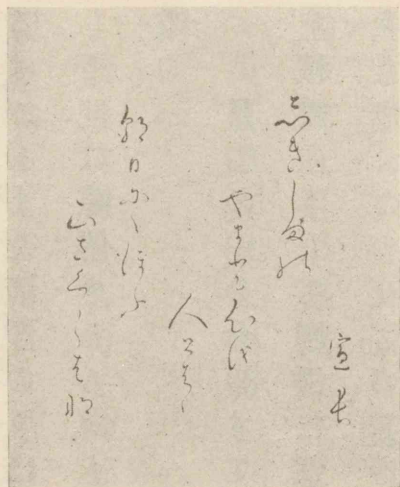
しきしまのやまと心を人とはば朝日ににほふ
山ざくらばな
本居宣長

この歌が日本一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清美を歌ひ出でたればなり。一體、朝は一日中にて最もすがくし

出づる

清暉

しき時なり。空に些かの曇もなき朝、東天に朝日の輝き出づるは、實に清爽なるものなり。その清暉に、櫻花中の粹たる山櫻の、はつと映發せるは、な



本居宣長筆蹟

ほ更にすがくしきものなり。朝晴天日の出山櫻、これだけの好き道具が揃はば、何人か爽快を覚えざるべき。これ即ち大和魂の本體なり。大和魂は即ち清淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し、日本男兒の死を

本體

散りぎは

ち清淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し、日本男兒の死を惜しまざるに似たりなどといふは、枝葉の事のみ。

田子の浦ゆ

打出でて見れば眞白にぞ富士の高

山邊赤人
奈良朝以前の
歌人。

八朶玲瓏
コトヒラケル
ツツク清く美し

喧傳

根に雪は降りける
山邊赤人
緑波一面鏡の如き田子の浦、そのあなたに、何處より見て
も形の變らざる扶桑一の靈山の、八朶玲瓏天を撃けて立て
るは、こもまた清淨のきはみにあらずや。この歌が名歌と
して、世に喧傳せらるゝも、畢竟この美の琴線に觸れたれば
なり。

榎本其角

本姓竹下、近
江國堅田の人
俳人、寶永四
年歿、年四十
七。

月雪の中や命のすてどころ
榎本其角

積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月、ひとり天に亘
えたり。この夜、この雪を踏み、この月光を浴びつゝ、氷刃を
きらめかして、亡君の仇を報いんと討入るは、決死の四十七
烈士。天も清し。地も清し。人も清し。當夜、吉良邸の隣

血性

身解

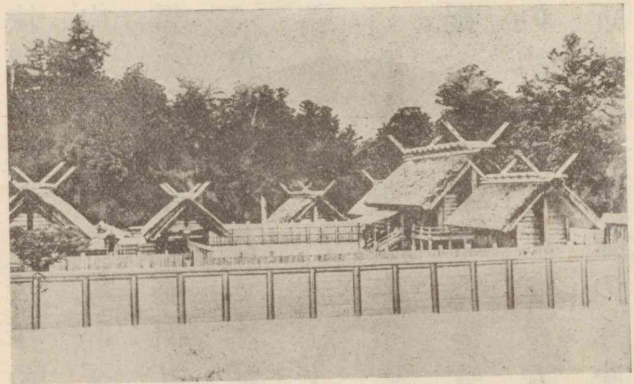
大高子葉
名は忠雄、源
吾と稱す、赤
穂四十七士の
一人、元祿十
六年二月歿、
年三十二。

屋敷にて催されし俳會に列せし其角その人は、元來血性の
快男子にして、清淨の美を身解せる人なり。而して義士の
中に加はれる大高子葉は、實にその俳友たり。月清きその
雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によ
く復讐の眞況と本體とを捉へ得て、清淨の美を極めたりと
謂ふべし。

妖艶

歌も俳句も、名句と稱せらるゝものは、多くはこの清美を
捉へたるものなるが、その他の美術・文藝、一つとしてこの心
の結晶ならざるはなし。花に對する感じの如きも亦然り。
近來、外國趣味の入來るにつれて、妖艶なる草花も輸入せら
れたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙や、昔も今も、日本國民の一

般に愛する花は、必ずや清淨なり。又、建築に於ても然り。



日光の東照宮、淺草觀音堂を見ると、我々日本人は、唯華麗を感じるのみにして、尊さを感じる事薄し。然るに、一たび去つて伊勢の大廟に詣でんか。千木高知れる建築、清淨の美をきはめて、そゞろに西行の歌のしのばるゝを覺えずんばあらず。若し大廟に向つて、壯大を求め、華麗を求むるものあらば、これ眞の日本

國民たる素質に缺けたるところあるものと云はざるべからず。

千木

西行の歌

何事のおはし
ますかは知ら
ねどもかたじ
けなきに涙こ
ぼるゝ。

らず。

滄海

滄海の中にありて、山青く、水清き我が日本は、土地そのものが既に清淨なり。開闢以來、未だ曾て外國に汚されざる我が三千年の歴史が、既に清淨なり。他民族の血液を多く混ぜざる我が民族の血統が、既に清淨なり。加之、我が國民は善を好みて惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて強を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に、風流さへ解して、物のあはれを知れる清淨なる人間なり。我が日本が、古來東海の君子國と呼ばるゝも、宜なる哉。

物のあはれ

「大町桂月全集」

一一 國史に返れ

徳富蘇峰

徳富蘇峰
名は猪一郎、
熊本縣の人、
貴族院議員、
文久三年生。
功科表

國史に返れ。日本國の歴史は大和民族の系圖である、吾人祖先の功科表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには、歴史を透して知るより他に方便がない。國史は實に忠實なる案内者である、信賴すべき指導者である。

平等觀
歴史觀
具へて

吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。すべての人類は平等觀よりすれば皆同胞である。されど歴史觀よりすれば、すべての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、而して丙國と甲國も亦

形式的

把持



徳富蘇峰

同じでない。十箇國あれば十箇國の相違があり、百國あれば百國の差異がある。この特殊の國性を維持する上に於て、はじめて獨立國の意義が完くされる。獨立國の本義は形式的に他の干涉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない。精神的に自主であらねばならぬ。詳らかにいへば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展し、發達

させねばならぬ。

我が大和民族の誇は、日本の歴史である。この歴史の中には、必ずしも悉く皆正しい事、善い事のみが満ちてはゐな

總括

い。必ずしも悉く敬ふべく、仰ぐべき事のみが溢れてはる
ない。人間は決して神様ではない。人間の所作には様々
の過失もあれば、罪悪もある。されど總括していへば、日本
の歴史は大和民族の恥辱史ではなく、光榮史である。
如何に日本の皇室が世界に比類なきあり難い皇室であ
るかは、國史が最も雄辯にこれを語つてゐる。如何に日本
の國民がその一旦緩急の際に處して、護國の精神の猛烈に
且勇敢であつたかは、國史がその證人である。如何に大和
民族の中に世界的偉人と比較して一步も劣らぬ者、即ち彼
自身また世界的偉人と稱するに足る者を生じたるかは、長
き年代の中に屢々接觸する所である。即ち我が明治天皇の

盛徳
剴切

盛徳大業も、國史の背景によつて始めて明白に、精詳に、剴切
にこれを會得することが出来る。即ち五箇條の御誓文の
如きも、國史の背景なきに於ては、只一種の雄快なる文書た
るにとゞまる。帝國憲法の如きも、國史の背景なきに於て
は、單に乾燥無味なる一部の法文にとゞまる。
およそ固陋頑冥の戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若
しくは詭激狂妄の赤化主義や、架空浮誇の摸倣精神や、いづ
れも我が國史を閑却したる爲といふを適當とする。現状
を株守するも國史を知らぬがため、現状に不安なるも國史
を知らぬがため、國民的自信力を失墜するも國史を知らぬ
がため、自惚根性にて醉生夢死するも國史を知らぬが爲で

戀舊思想

いづれも

株守

失墜

潜在

はないか。
「國史に返れ」とは、すべての國民が歴史家となれといふのではない。それには専門の學者がある。只、日本國民として、日本の歴史のその大なる筋道を諒解せよ。」といふのである。この歴史は、精神的に於ける日本の潜在せる寶藏である。苟くも國民的に生活し且活動せんとせば、まづこの寶藏にむかつてすべての物を求めるがよい。 「國民小訓」

一二 平泉の廢都

田山花袋

田山花袋
名は録彌、群馬縣の人、文學者、昭和五年没、年六十。

藤原氏三代の榮華の時には、あらゆる上方のものが平泉に移された。城廓もかなりに廣く、鎌倉覇府の址と比べて

三代
清衡・基衡・秀衡。

植ゑて

見ても、決して劣りはしなかつた。立派な人々も上方から大勢やつて來た。北上川の對岸に今もある東稻山（なほ）に櫻を植ゑて、そこを嵐山の勝になぞらへ、そして、北上川を櫻川と呼べた。

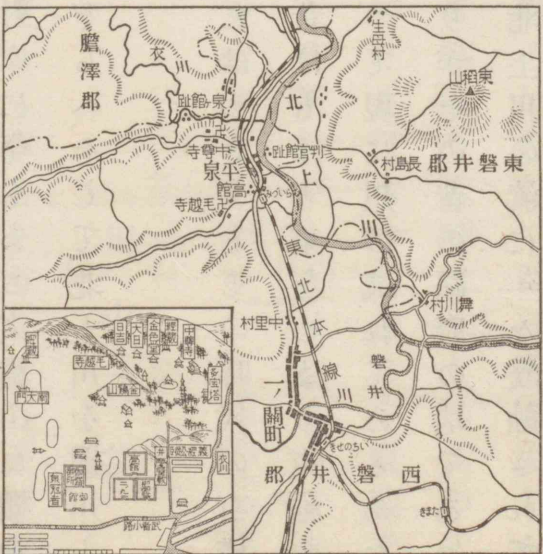
今、平泉沿革圖を見ると、殊にはつきりとその時代の有様が思ひやられる。北上川は昔はもつと東を、つまり東稻山のすぐ裾を流れてゐた。従つて現に川の流れてゐるあたり、または停車場のあるあたりが、その昔の覇府の地であつた。高館の坂の近傍は今も北上川の流に年々浸蝕されて、赤い絶壁が段々崩れて行つてゐるけれども、それは昔は覇府の西北の隅に當つて、小高い細長い丘陵をなしてゐた。

浸蝕

搦 搦 搦

そして、中尊寺・毛越寺などは、京都奈良の寺々と同じやうに、やはりその郊外に置かれたのであつた。

平泉の停車場を出て、寂しい村落を向うに抜けて行く間は、従つて皆昔の覇府の建物のあつた處である。柳の御所、伽羅の御所、國衡屋敷など、さうしたものが皆こゝにあつた。やはり鎌倉と同じやうに、その址は礎も何も残つてゐず、全く荒廢して大方田畑になつてゐるけれども、案



向うに

内者が、あれは金雞山といつて、この都の鎮めのために、秀衡が黄金の雞を埋めたといはれる山です。などと、小さな尖つた山を指さすのを見ると、さすがに昔の氣分にならずにはゐられなかつた。義經が年若くてこゝにかくまはれてゐた形や、最後に再びまたこゝに戻つて來た様などが、目のあたりで見てもするかのやうに、ありくと私の胸に描かれて見えた。

高館の丘陵を前にしたあの松竝木の中の感じは、殊に私には忘れかねた。田畑を取巻いて、丘陵の錯雜した形が好い。また數町の處に、北上の大河を豫想した形が好い。その松竝木の中を貫いて、汽車のレールの走つてゐる形が好

錯雜

レール
Rail

寂然

い。そこには高館に這入つて行くところに、それを標示した木標が立つてゐて、旅客は迷はずに行くことが出来るやうにしてあつた。

高館の址は半ば雑草に埋れて、判官堂がたゞ一つ寂しく立つてゐるばかりであつた。登り口の石段のでこぼこに壊れてゐるのも悲しかつた。

中尊寺・毛越寺などが覇府の址から見て郊外にあつて、そして、中には寂然として昔ながらの建物を残してゐるものもあるのが、私の心を惹いた。今では、旅客は平泉といふと、すぐ中尊寺や毛越寺へと出掛けて行く。そして、その残つたものばかりを珍らしさうに見る。しかも、そのなくなつた

址をば見ようとは思はない。それは残つた址も大切であ

る。しかし、それ以上に私は亡びた

址に心を惹かれるのであつた。

中尊寺では、例の金色堂が深く私

の心を惹いた。そこに三代の棺が

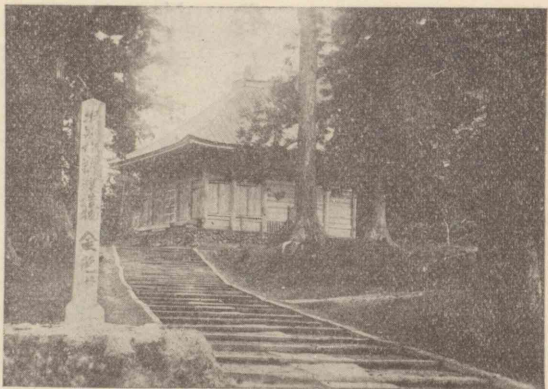
納めてあるのを思ふと、一層さうい

ふ氣がした。また當時の美術・工藝

の趣を知ることが出来ると思ふと、

一層さういふ氣がした。小さな堂

ではあるけれども、奈良の諸寺と共に、日本では最も珍としなければならぬものである。



金色堂

芭蕉
松尾氏、伊賀
の人、俳人、
元祿七年歿、
年五十一。

幻影

芭蕉* などの行つた時分には、まだあたりがさう大して開
けず、寺なども荒廢してゐて、寶物も十分に見ることが出来
なかつたであらうが、今日では平泉の状態はかなりに世に
知られてゐる。私は清衡が建てた中尊寺、基衡が建てた毛
越寺、またその子の秀衡が建てた無量壽院などの山に凭り
谷に枕した様を頭に浮べると、一つの大きな古代の幻影が
そのまゝそこにはつきりと出て来るのを感じずにはゐら
れない。廢都——日本で完全にさうした趣の味は、れる
のは、奈良を外にしては、第一に指をこゝに屈しなければな
らない。

高館の丘の崖が北上川の水勢のために年々崩れて、その

指點

飛鳥
允恭天皇はじ
め七代の皇居
の地。

時分その中心地區であつた市街が、半分以上川の流域の中
になつてしまつてゐることを想像した。また今日存して
ゐる柳の御所の址や、伽羅の御所の址の位置などから推し
ても、一般の市街がその東南の地區であつたのがはつきり
指點されることを想像した。それから考へて見ても、この
平泉は、大和の飛鳥*あすかの都などよりも、もつとぐつと大きかつ
たことを想像することが出来た。小さな奈良といふより
も、あの藤原時代の繁華をそのまゝこゝに移したやうな東
奥の小さな京都、さういつただけでも、その時代の幻影がは
つきりと眼の前に浮んで来る。あたりを取巻いた山の形が、既にさうではないか。土地

扼す

大堰川
嵐山
共に京都の西
郊にあり。

の咽喉を扼した形がいかに城らしい感じを與へる。ではないか。北上川を大堰川おほほに、東稻山を嵐山あらしに擬して、そこに山櫻を澤山植ゑたのなども面白いではないか。御所といふ名をつけた館の址がここに残つてゐて、その周圍に更に大きく寺の址を残してゐるのも、その都の規模の小さくなかつたことを語つてゐるではないか。秀衡が金雞山に漆一萬杯に黄金をまじへて埋藏し、それを子孫に傳へたといふ傳説も面白いではないか。またその時それを歌つた「朝日さし夕日輝く木の下に、漆萬杯こがね置く。」といふ俗謡が今に残つてゐるのも懐かしいではないか。そして、その館の址を過ぎ、都の址を過ぎ、寺の址を過ぎて、最後に三代

まじへて

の主の棺の置いてある金色堂に突當るといふのも、人生を語つてゐるのではないか。またそのあたりに、一切經藏だけが焼けずに残つてゐるといふのも、深く人をして考へさせるではないか。

明治二十八年、私が最初行つた時には、芭蕉などの頃と餘り變らぬらしい寂しさと荒廢した様とが残つてゐたやうであつたが、今では大きな保勝道路などといふのが出來て、中尊寺から毛越寺の方へ行く路など、わるく新しくなつてしまひ、毛越寺の芭蕉の句碑のあるあたりや、安倍宗任の女で基衡の室であつた人の墓のあるあたりなども、わるく俗になつてしまつたのは遺憾である。

保勝道路

句碑

運慶
鎌倉時代の佛師。

中尊寺では、それでも金色堂と一切經藏とが残つてゐるので、いくらか當時の有様を想ふことが出来るけれども、毛越寺の方には何一つ残存してゐない。運慶*が作った薬師佛——それが出来あがつた時、鳥羽法皇がそれを見て、洛外に出て東國に赴くのを惜しませられたといふ薬師佛などが残つてゐたなら、それこそどんなに私達の心を惹くことであらう。しかし、さういふものは今は殆どなくなつて、ただ大阿彌陀堂といふ二間四方ばかりの茅葺の小堂のうちに、塵埃にまみれた阿彌陀佛の坐像だけが残つてゐた。私はそれを見て一層残念な氣がした。

「古人の遊蹟」

一三 いかのぼり

梅三株漁村を守る社かな	虚子
春の夜や机の上の肱まくら	同
のどかさ寝てしまひけり草の上	東洋城
いかのぼり比良のあなたに吹かれけり	四方太
櫻いけて天井低き思ひかな	紅緑
子雀の一尺飛んで親を見る	紫影
井戸端に鯛切る人や藤の花	青々
梨壺の五人召されぬ春の宵	露石
行く春や空は淺葱にしやがの花	同

虚子 本名高濱清、愛媛縣の人、俳人、明治七年生。

東洋城 本名松根豊次郎、東京市の人、俳人、明治十一年生。

四方太 姓は坂本鳥取縣の人、東京帝國大學助教、大正六年歿、年四十五。

紅緑 本名佐藤治六、青森縣の人、小説家、明治七年生。

紫影 本名藤井乙男、兵庫縣の人、文學博士、京都帝國大學名譽教授、明治元年生。

青々 本名松瀬彌三郎、大阪市の

「春夏秋冬」

人、俳人、明治二年生。
露石
本名水落義式、
大阪市の人、
俳人、明治五年生。

大類 伸
東京市の人、
歴史家、文學
博士、東北帝
國大學教授、
明治十七年
生。

ライオン
Lion.
豪強

一四 青葉城

大類 伸

青葉城を築いたのはいふ迄もなく伊達政宗で、慶長七年のことである。政宗が一代の風雲兒として、奥州の天地に活躍したことは、戦國時代の歴史を繙いた人の能く知る所であらう。東北のライオンともいふべき豪強の青年政宗も、遠く上方から押しよせられた大きな手——その名を秀吉といふ——に搦まれては、怨を呑んでその前に屈するの外はなかつた。そのみでなく、ついで第二の大きな手——その名を家康といふ——がのばされた時も、時勢は彼を

してそれを拂ひ除けることを許さず、かへつて彼はそれと堅い握手をして、我れ東北に在り、君意を安んじて可なりといふ態度に出た。



伊達政宗

鞍上に顧眄して三軍を叱咤した雄將が、泰平の世に志を伸ぶべき途は、古往今來土木を起すに決つてゐる。それは隠居様の盆栽いちりとは違つて、道樂のみではなく、實は國內統治の上にも必要のことであつた。かくして仙臺青葉城は築かれ、松島瑞巖寺は起工された。豪宕の精神がその土木の上に現れて來るのは當然である。青葉城と瑞巖寺

顧眄

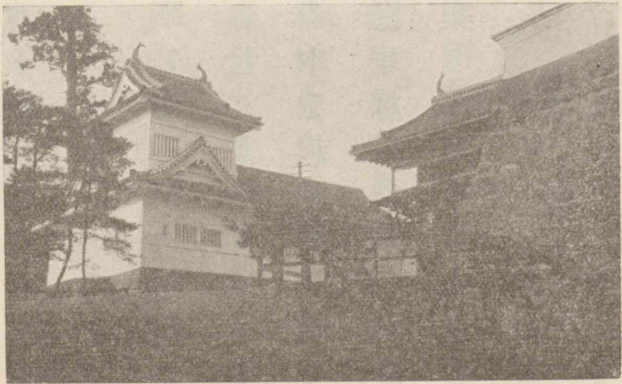
いちり

豪宕

とは同じ意味を以て見らるべき史蹟であらう。

教へて

私は車を備つて、仙臺城址の見物に出かけた。案内の車夫がよく説明をしてくれる。途中大きな椎樹があつた、それは伊達安藝の時代に何とかした處だとかいつた。又曲り角に昔の屋敷の片われが残つて居て、半分は學校用品店となつてゐる。車夫は「旦那、これが政岡の屋敷ですよ。」と説明する。その他、原田甲斐の屋敷はあの方角で、誰の屋敷は何處にあつたなどと教



青葉城大手門

へてくれる。私はもう新しい仙臺市中の人ではなくて、仙臺の御城下に居るやうな氣がした。

大手通のだら／＼坂を降りて、廣瀨川の岸に出ると、青葉一帯の峰は屏風の如く前面に展開された。見渡すところ一帯の峰巒、いづこも緑ならぬ處はない。實際に青葉山である。その青葉の間に堂々たる城門が見える。そして柱や、梁には、菊桐の紋章が燦として輝いてゐる。確かにこれ壯觀たるを失はない。元來仙臺城のこの城門は、枳形櫓門を備へた普通の城門とは違つて、社寺の樓門に類したものであるが、その地形の秀拔なのと、背景の峰が立派なので、門そのものも亦他には見られない莊嚴の觀を呈してゐる。

備へた

秀拔

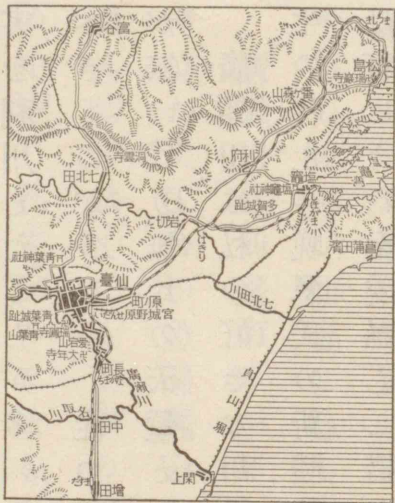
この門は大手門で、二の丸の入口に當る。本丸は更にそれよりも數町離れた山上にあるが、今は公園のやうになつて諸人遊觀の場所となつてゐる。

急峻

急峻な曲り紆つた坂を三四町ばかり登れば、本丸の頂に出る。こゝは廣場で、嘗ては天守を建てる計畫もあつたのだが、それは出來ずにしまひたゞ昔そこには壯麗な殿館と望樓があつた。その殿館には、城門と同じく菊桐の紋章打つた金具が輝いて居つた。これ等はみな伊達家が朝廷から許されての上のことであつた。要するに、菊と桐とは伊達家の土木に伴ふ一特色かと思はれる。併し今は本丸には石壘の外何も残つて居らず、忠魂社と記念碑とがあるば

望樓

かり、私が登つた折には、兵士が大勢で教練をやつて居つた。本丸址の高地からの眺望は實に壯快である。仙臺市の



全部は固より、宮城野から遙かに遠く海上を走る白帆さへも望むことが出来る。眼前には老杉鬱々と茂つた經が峰から、愛宕の高臺、大年寺の森迄見渡される。そしてこれ等の社寺

が置かれた地點は、いづれも要害の地で、萬一の際には仙臺城の出城に利用され得るのである。古英雄の用意周到なるは感歎に堪へない。殊に大年寺は伊達家第四代以下の

斷崖

城壕

天塹

土井晚翠

名は林吉、仙臺市の人、第二高等學校教授、明治四年生。
「天地有情」
明治三十二年四月刊。

廟所で、地形の秀拔なのが著しく目についた。又斷崖の下は廣瀨川の急流が大屈曲をなして流れてゐるが、これが實に仙臺城の城壕をなすのである。元來仙臺城は天然の要害を利用したことが多いので、人工上の設備に於ては見るべきものが少ない。従つて人工的の城壕では立派なものがない代り、無比の天塹ともいふべき廣瀨川がある。廣瀨川は私の好きな川の一つである。私が中學の五年生の時、土井晚翠氏の新體詩集「天地有情」が出版されたが、私は實にそれを愛誦して措かなかつた。「廣瀨の流れかはらねど、もとの水にはあらずかし、汀の櫻花散りて、匂ゆかしの藤衣、うつせし水は今いづこ」とか、「うらみを吹くや年毎の瑞

鳳山の春の風」とかいふ句を讀んでから、廣瀨川や瑞鳳山の名は私に慕はしいものとなつた。そして今から十年前に、廣瀨川や瑞鳳山を實地に目撃してから、益々好ましくなつた。十年の後再び仙臺に遊んで、この感は更に深いのである。

急湍
廣瀨川は仙臺市の一部を流れる川だけれども、兩岸の削り立つた工合や、急湍瀨をなして翠綠滴るばかりの間を流れる様子は、とても市中の川とは思はれない。ましてや川の中洲に乳牛が多く放してあるなどは、殊に面白く感ぜられた。青葉山の要害に據り、廣瀨川を天然の城壕に構へたことは、確かに仙臺城の誇であらう。その奇抜な趣の間に、私は藩祖政宗の風貌を想見したのである。
「史蹟めぐり」

風貌

構へた

一五 白鷺

五十嵐 力

五十嵐 力
山形縣の人、
國文學者、文
學博士、早稲
田大學教授、
明治七年生。

夕立が降つて來た。まづぼつりぼつりと白玉のやうな
大きいのが間遠に落ちて、やがて小さいのがばち／＼ざあ
ざあと足繁く降つて來た。空は篠つく雨としぶきとで、大
騷亂を演じてゐる。白い長い雨足が空中を隈どつて、風の
まに／＼北へ北へと移つて行く。屋根の上は川をなして、
樋の受けきれぬ水がナイヤガラナイヤガラの瀧のやうに軒端から直
下する。南縁の雨戸はもう締めねばならぬやうになつた。
激しい雨の勢にも潮のやうな強弱きよじやくがあつて、凡そ四五十
分も續いたであらう。やがて天地が明るくなつて、日影が

ナイヤガラ
Niagara.
アメリカ合衆
國とカナダと
の國境にあ
り。

赫怒
洗滌

あざやかに射して來た。きまり悪げに降つてゐる名残の
雨は、落武者のやうに次第次第に遠ざかつて、遂に全く其の
影を收めた。造化の赫怒に大洗滌を加へられた雨後の天
地は、到る所光と潤ひと生命とに満ちてゐる。
締めた雨戸は明けはなされた。同時に、

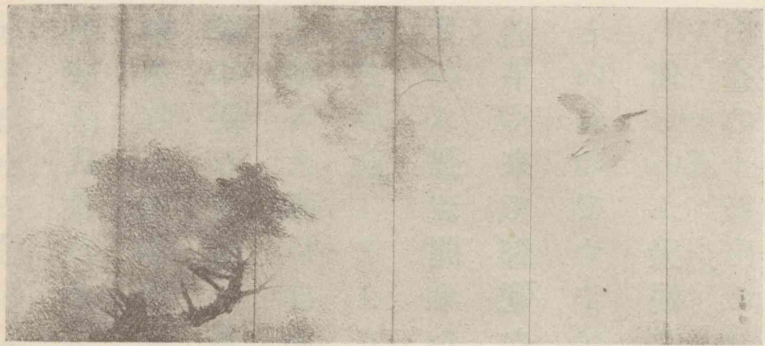
「まあ！」

といふ聲が聞えた。續いて、

「早く來て御覽なさい。あの綺麗なこと！」

といふので、すぐに縁側に飛出した。

何といふ美觀であらう。東福寺から植物園にわたる丸
山臺の十數町の林は、白鷺の群で雪のやうになつてゐる。

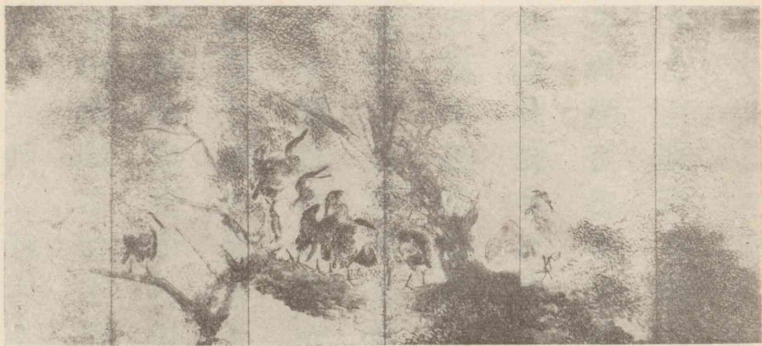


雨 霽 圖

飛んでゐるもの、とまつてゐるもの、團かたまつてゐるもの、散らばつてゐるもの、それが雨に締まつた濃緑を背景にして、それ〴〵に鮮やかな姿をうかしたした趣は實に繪にもつくされぬ美しさである。伊達の森の白鷺が羽はね馴らしに雛を連れだしたのであつた。

伊達の森といふのは宇和島の伊達家の屋敷で、日本一の鳥藪といはれてゐる。三月時分から九月十月の頃まで、此の藪に巢をくつてゐる白鷺、五位

孵化



(筆 風 栖 内 竹)

鷺の數は、四五萬もゐるであらう。其の間、此の近傍では朝から晩まで何時空を仰いでも、二十羽三十羽の鷺を見ないことがない。此の夥しい鷺が此處で卵を産んで、雛を育てて、霜の降る時分に南國へ移つて行くので、四月より五月にわたる雛の孵化かる頃になると、殊に夜分などは、雛鳥のびい〴〵いふ聲が相合して、工場の機械の運轉するやうに聞える。此の雛が孵化つて四五十日たつと、親鳥が時々雛を連れ

だして飛ぶ稽古をさせるが、其の飛ぶ稽古を大演習的に大仕掛にやるのが年に二三回ある。今日のが即ち其の大仕掛の演習である。

同じ程の大ききで、同じく眞白に見える中にも、親鳥はやはり親鳥らしく、がつしりとひねた容子をして、子供等を顧み勝ちに樂々と飛んで行く。雛は不揃な飛び方をして、ばたばたと早く飛んでは一休みし、一休みしては早く飛びつ、親鳥につき纏うて行く。親鳥が高い木の尖頂（せんてい）に立つて下を見てゐると、數十羽の雛が下枝に竝んで、口を開くやうにして親鳥を仰いでゐる容子など、何といふ可愛さであらう。

驟雨

青山
東京市赤坂區
もと練兵場あ
り、現在の明
治神宮外苑。
習志野
千葉縣千葉郡
西北部の曠
原、有名なる
練兵場所在
地。

今日の大演習は、驟雨の後の快晴の氣持よさにそゝのかされた臨時の催しであつたであらう。彼等の中にも小隊長、大隊長、總大將といふやうなものがあるであらう。いろいろの號令の使ひわけがあるであらう。伊達の森は彼等が夏を過す別荘で、南國の何處かには別に冬を過す別荘を持つてゐるであらう。彼等は丸山臺の森を青山（せいざん）か習志野かのつもりであるであらうなどと、取りとめもなき空想に耽りつゝ、しばらく立ちつくした。

眞白な空中の演習隊が全く伊達の森に引上げたのは、凡そ一時間の後であつた。

「野草集」

一六 蜂

吉村冬彦

吉村冬彦
本名寺田寅彦、高知縣の人、理學博士、東京帝國大學教授、明治十一年生。

私の宅の庭は、割に脊の高い四つ目垣で、東西の二つの部分に仕切られてゐる。東側の方のは、應接間と書齋とその上の二階の座敷に面してゐる。反對の西側の方は、子供部屋と自分の居間と隠居部屋とに三方を圍まれた、中庭になつてゐる。この中庭の方は、垣に接近して小さな花壇があるだけで、方三間ばかりの空地は子供の遊び場所にもなり、又夏の夜の涼み場にもなつてゐる。

この四つ目垣には野生の白薔薇をからませてあるが、夏が來ると、これに一面に朝顔や豆類を這はせる。その上に

生える
くらくら

見え。

自然に生える烏瓜も搦んで、殆ど隙間のないくらゐに色々な葉が密生する。朝戸をあけると、赤紺・水色・柿色さまざまの朝顔が咲揃つてゐるのは、かなり美しい。夕方が來ると、烏瓜の畑のやうな淡い花が繁みの中から覗いてゐるのを、蛾がせゝりに來る。薔薇の葉などは隠れて見えないくらゐであるが、垣根の頂上からは幾本となく勢の好い新芽を延ばして、これが見えるやうに日々生長する。これに又朝顔や豆の蔓が搦みついて、何處迄も空へ空へと競つてゐるやうに見える。

このさかなな勢で生長してゐる植物の葉の茂りの中に、枯れかゝつたやうな薔薇の小枝から、煤けた色をした妙な

ものが一つぶら下つてゐる。それは蜂の巢である。

私が始めてこの蜂の巢を見付けたのは、五月の末頃、垣の白薔薇が散つてしまつて、朝顔や豆がやつと二葉の外の葉



吉村冬彦

を出し始めた頃であつたやうに記憶してゐる。花の落ちた小枝を剪つてゐる内に、氣が付いてよく見ると、大きさはやつと拇指の頭位で、まだほんの造り始めのものであつた。これにしつかりしがみついて、黄色い強さうな蜂が一匹働いてゐた。

蜂を見付けると、私は中庭で遊んでゐる子供達を呼んで、

剪る
拇指

アンモニア
Ammonia.

しまはう

見せてやつた。都會で育つた子供には、こんなものでも珍らしかつた。蜂の毒の恐ろしい事を學んだ長子等は、何も知らない幼い子にいろんな事をいつて、警めたり、おどしたりした。自分の子供の時に蜂を怒らせて耳たぶを刺され、さんしちの葉をもんですりつけた事を想ひ出したりした。あの時分はアンモニア水を塗るといふやうな事は、だれも知らなかつたのである。

兎に角こんな處に蜂の巢があつてはあぶないから、落してしまはうと思つたが、蜂のゐない時の方が安全だと思つて、その日はその儘にして置いた。

それから四五日はまるで忘れてゐたが、或朝、子供等の學

蜂窩

くはへて

ミリメートル
Millimeter.

校へ行つた留守に庭へ下りた何かの序に、思ひ出して覗いて見ると、蜂は前日と同じやうに、軀を逆さまに巢の下側に取りついて仕事をしてゐた。二十位もあらうかと思ふ六角の蜂窩の一つの管に、繼ぎ足しをしてゐる最中であつた。六稜柱形の壁の端を顎でくはへて、ぐる／＼と廻つて行く。壁は二ミリメートル位長く延びて行つた。その新たに延びた部分だけが際立つて生々しく見え、上の方の煤けた色とは著しくちがつてゐるのであつた。

一廻り壁が繼ぎたされたと思ふと、蜂は更にしつかりと身體の構へを直して、そろ／＼と自分の頭を今造つた穴の中へ插しいれて行つた。いかにも用心深く徐々と身體を

無慚

曲げて、頭の見えなくなる迄插しいれたと思ふと、間もなく引出した。穴の大いさをたしかめて、始めて安心したといつたやうに見えた。それからすぐ隣の管に取りかゝつた。私はこの歳になる迄、蜂のこのやうな舉動を詳しく見た事がなかつたので、強い好奇心に驅られて見てゐる内に、この小さな昆虫の巧妙な仕事を、無慚に破壊しようといふ氣にはどうしてもなれなくなつてしまつた。

それからは時々、庭へ下りる度にわざ／＼覗いて見たが、蜂のゐない時は寧ろ稀であつた。見る度に六稜柱の壁は段々に延びて行くやうであつた。

或時は顎の間に灰色の泡立つた物質を一杯溜めてゐる

事が眼についた。そして壁を延ばす代りに、穴の中へ頭を挿しこんで、内部の仕事をやつてゐる事もあつた。しかしそれがどういふ目的で、何をしてゐるのだから、自分にはわからなかつた。

その内に私は何かの仕事にまぎれて、しばらく蜂の事は忘れてゐた。多分半月程経つてからと思ふが、或日ふと思ひ出して覗いて見ると、蜂は見えなかつた。のみならず、巢の工事は、前に見た時と比べて、ちつとも進んでゐないやうであつた。なんだか豫想が外れたといふだけでなしに、一種の——ごく軽い寂しさといつたやうな心持を感じた。それから後は何時迄経つても、もう蜂の姿は再び見えな

捕へる

かつた。私はどうしたのだらうと、色々な事を想像して見た。往來で近所の子供にでも捕へられたか、それとも私の知らないやうな自然界の敵に殺されたのかとも考へて見た。しかし又この蜂が、今現に何處か遠い處で、知らぬ家の庭の木立に迷つて、あてもなく飛んでゐるやうな氣もした。私は親しい友達などが死んだ後に、獨りで街の中を歩いてゐると、ふとその友が現に同じ東京の何處かの町を歩いてゐる姿をあり／＼想像して、言知れぬ寂しさを感じる事があるが、この蜂の場合にも、これとよく似た幻を頭に描いた。そして強い眩しい日光の中に、きら／＼して飛んでゐる蜂の幻影が、妙に寂しいものに思はれて仕方がなかつた。

眩し

控へた

或日、何かの話の序に、Sにこの話をしたら、Sは私とは丸
でちがった解釋をした。蜂は、場所が悪いから、斷念して外
へ移轉したのだらうといふのである。さういはれて見れ
ば、或はさうかも知れない。實際兩側に廣い空地を控へた
この垣根では、嵐が吹通したり、雨に洗はれたり、人の接近す
る事が頻繁であつたりするので、蜂にとつては餘り都合の
いゝ場所ではない。しかし、果して蜂がその本能、或は智慧
で判斷して、一旦選定した場所を作業の途中で中止して、他
所へ移轉するといふやうな事が有るものか、無いものか、こ
れは専門の學者にでも聞いて見なければ、わからない事だ
ある。

本能

強ひて

感傷

樂天家
厭世家

若しSの判斷が本當であつたとしたら、つまり私は自分
の想像の中で、強ひてあはれな蜂を殺してしまつて、その死
を題目にした小さな詩によつて、安直な感傷的の情緒を味
つてゐた事になるかも知れない。しかし、いづれにしても、
私は私の幻想を無雜作に事務的に破つてしまつたSに對
して、軽い不平を抱かないではゐられなかつた。そしてこ
んな些細な事柄にも、樂天家と厭世家との差別は現れるも
のかと思つたりした。

今日覗いて見ると、蜂の巢のすぐ上には、棚蜘蛛が網を張
つて、その上には枯葉や塵埃が一杯にきたなくなつてしまつて
る。蜂の巢といひながら、やはり住む人がなくては、荒果て

カナ
Canna.

た廢屋のやうな氣がする。この巢のすぐ向側に眞紅の力
ンナの花が咲亂れてゐるのが、一層蜂の巢をみじめなもの
に見せるやうであつた。

私は兎も角も、この巢を來年の夏迄この儘そつとして置
かうかと思つてゐる。來年になつたら、この古い巢にもし
や何事か起りはしないかといふやうな豫感がある。「冬彦集」

一七 松阪の一夜

佐佐木信綱

佐佐木信綱
三重縣の人、
國文學者、歌
人、文學博士、
東京帝國大學
講師、明治五
年生。

時は夏の半ば、「いやとこせ」と、のどやかに唄ひつれゆくお
伊勢參りの群も、春さきほどには騒がしからぬ伊勢松阪な
る日野町の西側、古本を商ふ老舗柏屋兵助の店さきに、「御免」

いうて

皇國學

出迎へ。

あわたし

田安様
田安宗武のこ
と、宗武國學
を好み、特に
歌を能くす、
明和八年歿、
年五十七。

というて腰をかけたのは、魚町の小兒科醫で年の若い本居
舜庵であつた。醫師を業とはして居るものの、名を宣長と
いうて、皇國學の書やら漢籍やらを常に買ふこの店の得意



本居宣長

であるから、主人は笑ましげに出迎
へたが、手をうつて、「あゝ残念なこと
をしなされた、あなたがよく名前を
いつておいでになつた江戸の岡部
先生が、今のさき若いお弟子と、供を
つれてお立ちよりになつたに」といふ。舜庵は、先生がどう
してこゝへ」といつものゆつくりした調子とは違つて、あわ
たゝしく問ふ。主人は、「何でも田安様の御用で、山城から大

なさらう

和とお廻りになつて、歸りを參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお着きになつたところ、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留、今朝はもうおよろしいとの事で、御出立の途中を『何か古い本はないか』と暫くお休みになつて、參宮にお出かけになりました。『舜庵、それは残念なことである、どうかしてお目にかゝりたいが。』跡を追うてお出でなさいませ、追ひつけませう。』と主人がいふので、舜庵は一行の様子を大急ぎで聞きとつて、跡を追つた。湊町・平生町・愛宕町を通り過ぎ、松阪の町を離れて次の宿なる垣鼻村のさきまで行つたが、どうしてもそれらしい人に追ひつき得なかつたので、すこゝと我が家に戻つて來た。

本陣

貫ひたい

樹敬寺

松阪町にあ
り、淨土宗。

塔頭

あへず

村田春郷

江戸の人、明
和五年歿、年
三十。

村田春海

後年松平定信
に仕ふ、文化
八年歿、年六
十六。

有徳公

徳川吉宗、第
八代將軍、寶
暦元年歿、年
六十八。

數日の後、岡部衛士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、再び夕暮に松阪の本陣新上屋に宿つた。「萬一歸りにまた泊られることがあつたらば、どうか知らせて貰ひたい。」と頼んでおいた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得た。樹敬寺の塔頭なる嶺松院の歌會に赴いて、今しも歸つて來た彼は、取るものも取りあへず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は廿五、その弟の春海は十八の若盛りで、早くも別室にくつろいでをつた。衛士はほの暗い行燈の下に舜庵を引見した。

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衛士は當年六十七歳、その大著なる「冠辭考」「萬葉考」なども既に成り、將軍有徳公の第二子田安

嘖々

中納言宗武の國學の師として、その名嘖々たる一世の老大家である。年老いたれど頼豊かなる、この老學者に相對して居る本居舜庵は、眉宇の間にほとばしつて居る才氣を、溫和な性格が包んで居る三十四歳の壯年。しかも彼は廿三歳にして京都に遊學し、醫術を學び、廿八歳にして松阪に歸り、醫を業として居たが、京都で學んだのは啻に醫術のみでなくして、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。舜庵は長い間欽慕して居た身の、ゆくりなき對面を喜んで、かねて志して居る古事記の註釋に就いて、その計畫



賀茂眞淵

契沖
名は空心、俗姓下河、大阪高津圓珠院の住僧、歌人、國學者、元祿十四年寂、年六十二。
蘊蓄
欽慕

神典 漢意

を語つた。老學者は若人の言を靜かに聞いて、懇ろにその意見を語つた。「我ももとより神典を解きあきらめん志があつたが、それにはまづ漢意を清くはなれて、古のまことの意を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の言を得た上でなければならぬ。古の言を得んには、萬葉をよくあきらめねばならぬ、故に我は専ら萬葉をあきらめて居た間に、既にかく年老いて、残りの齡いくばくも無く、神典を説くまでにいたることを得ない。御身は年盛りに、ゆくさき長ければ、怠らず勤めなば、必ず成しとげ得らるゝであらう。しかし世の學に志す者、皆低い處を經ないで、すぐ高い處へ登らうとする弊がある故に、低い處をさへ得る事が出來ぬの

である。このむねを忘れず心にしめて、まづ低い處をよく固めおいて、さて高い處に登るがよい。」と諭した。

まだきに
夏の夜はまだきに更けやすく、家々の門みな閉し果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてつた若人は、さらでも今朝から曇り日の、闇夜の道のいづこを踏むともおぼえず、中町の通を西に折れ、魚町の東側なる我が家のくゞり戸を入つた。隣家なる桶利すかひの主人は律義者で、いつも遅くまで夜なべをして居る。今夜もとん／＼と桶の箍をいれて居る。時にはかしましいと思ふ折もあるが、今夜の彼の耳には何の音も響かなかつた。

村田傳藏
寶曆年間眞淵
の門に入る。

舜庵は、後に江戸に便を求め、翌十四年の正月、村田傳藏が

うけひごと
答へた

中に入つて名簿をさゝげ、うけひごとをしるして、縣居の門人録に名を列ぬる一人となつた。爾來松阪と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、これは答へた。門人とはいへ、その相會うたことは纔かに一度、たゞ一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を去る百七十年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松阪中町なる新上屋の行燈は、その光の下に語つた老學者と若人とを照した。しかもそのほの暗い燈火は、我が國文學史の上に不滅の光を放つて居るのである。

「賀茂眞淵と本居宣長」

一八 大聖の義務心

穂積陳重

穂積陳重
愛媛縣の人、
法學博士、樞
密院議長、男
爵、大正十五
年歿、年七十
二。

ソクラテス
Socrates.

ギリシャの哲
學者。(西紀前
四〇〇前元也)
絶えず

瞬々

冷え

古今の大哲人ソクラテスが、毒杯を仰いで従容死に就かんとした時、多数の友人門弟等は絶えずその側に侍して、師の臨終を悲しみながらも、亦その人格の偉大なるに驚歎してゐた。

ソクラテスは鳩毒を嚙みをはった後、暫時の間は、彼方此方と室内を歩みながら、平常の如くに門弟等と種々の物語をして、恰も死の影の瞬々に蔽ひ懸つて來つゝあるのを知らないやうであつたが、毒が次第にその效を現して、脚部が次第に重くなつて冷えはじめ、感覺を失ふやうになつて來

無感覺

クリトーン
Kriton.
ソクラテスの
門人。



後最のステラクソ

た時、彼は先に親切なる一獄卒から、すべて鳩毒の働き方は、先づ足の爪先より次第に身體の上部へ進んで行くものであるといふことを、聞いて居つたので、自分の身體に度々觸れて見ては、その無感覺の進行の有様を感じて居つた。さうして、それが心臓に及ぶと死ぬるのであるというて居つたが、やがてそれが股まで進んで來た時、急に今迄面に被つてゐた布を披いて、クリトーンを顧みて、次の如く語つた。

アスクレーピオス
Asklepios.
ギリシヤ神話中の醫神。
辨濟
實踐訓
プラトン
Platon.
ギリシヤの哲學者。(西紀前四七〇頃前)プラトーン
Phaidon.
ソクラテスの學徒、「ファイドーン編」はソクラテスとファイドーンとの對話を記したるものなり。

「クリトーンよ、余はアスクレーピオスから鶏を借りてゐる。この負債を辨濟することを忘れてはならぬ。」
嗚呼これ實に大聖ソクラテスの最後の一言であつて、こは實に「その義務を果せ」といふ實踐訓を示したものである。
プラトンの「ファイドーン」編の末尾に記していはく、「彼は實に古今を通じて至善・至賢・至正の人なり。」と。 「法窓夜話」

一九 香氣ある生活

竹越三又

昨日、或席上にて一場の談話を求められ候ひしまゝ、
「人の香」といふ演題にて、花ならば梅たり、薔薇たり、蘭花
たらんことを人々に求め候ひき。今茲に、少年諸君の

爲に、更に此の趣旨を開陳致したく候。

山野に花卉少なからずと申せども、香芬あるものは多からず候。而も香芬あるものは藪澤の中にありとも、人の爲に認めらるべく候。是と同じく、人も亦香氣とある者とならんことこそ願はしく候へ。人の香氣とは、其の才智・藝能に伴なふ所の崇高なる精神を申すに候。苟くも之あらんか、其の事業の大小を問はず、必ず生命あり色彩ありて、人を動かし、人を感じしめ、人に認めらるべく候。

さて、人の香氣は何より來たるかと申し候に、自敬の念より來たることを忘るべからず候。自敬とは自ら

開陳

香芬

藪澤

自敬の念

眇

恥づ

獨行影に……
「獨立不_レ慚_テ
レ影_ニ、獨寢不_レ愧_シ衾_ニ。」
（劉子新論）
惡木の蔭……
「渴_キ不_レ飲_ニ、盜泉_ヲ、水_ヲ、熱_シ不_レ息_ニ、惡木_ノ蔭_ニ。」
（陸機）



阿新丸（菊池谷齋筆）

尊大に構ふる譯にては之なく、自己が自己に對して敬意を表することに候。此の身惜しむべしと思ふ一念に候。眇たる此の身も天地の精靈を宿したる一塊なれば、大いに發しなば、如何なる働を爲さんも知るべからず候。然るに、目前の劣等なる慾情に追はれて、尊からぬ所業を爲さんば、恥づかしき限りに候。「君子は惡木の蔭に宿らず」と申すも、皆同じ意義にて、己を敬ふ念より出でたる語に候。昔、アレクサンドル大王に對して、敵軍に夜討をかけんと申し出でたる者ありける時、大王之を却けて、「朕は勝利を盜まず」と申され候ひき。又、日野阿新丸が父の仇を討ちける時、先づ其の枕を蹴つて、目を覺さしめて後之を撃ち候ひき。古今戦勝の將軍、復仇の子少なからざる中に、此等の人のみ多く語り傳へらるゝは何故なるかと言ふに、其の所業に精神あり、香氣あるが爲に外ならず候。近來、我は如何にして富を作れるか」といふが如き俗悪なる成功談の傳へらるゝがため、少年を誤ること少なからず候。小生は、少年諸君が唯其の才智藝能によりて、一時體裁よく暮すといふやうなる投機談に迷は

アレクサンドル大王

Alexander the Great

マケドニア王、ギリシヤ、シリヤ、ペルシヤ、エジプト及びインドを征服せり。（西紀前三三六、前三三三）
日野阿新丸
藤原資朝の子十三にて父の仇本間三郎を討つ。傳へ

投機談

王に對して、敵軍に夜討をかけんと申し出でたる者ありける時、大王之を却けて、「朕は勝利を盜まず」と申され候ひき。又、日野阿新丸が父の仇を討ちける時、先づ其の枕を蹴つて、目を覺さしめて後之を撃ち候ひき。古今戦勝の將軍、復仇の子少なからざる中に、此等の人のみ多く語り傳へらるゝは何故なるかと言ふに、其の所業に精神あり、香氣あるが爲に外ならず候。近來、我は如何にして富を作れるか」といふが如き俗悪なる成功談の傳へらるゝがため、少年を誤ること少なからず候。小生は、少年諸君が唯其の才智藝能によりて、一時體裁よく暮すといふやうなる投機談に迷は

不遇

失意落膽

ず、精神あり、香氣ある生活を營まんことを希望致し候。香氣ある人は世間必ず之を認むべく、一時の不遇は決して失意落膽するに及ばず候。

以上は平凡なる語に候へども、小生が平常家兒輩に語り居る所のものに候へば、無難にして間違なきことだけは確信致し居り候。小生は少年諸君が退いて右の香氣を養はれんことを偏に希望致し候。 「讀書樓間話」

二〇 藤樹先生

橘 南 谿

先生は俗稱中江與右衛門といひて、江州大溝の在中小川村の産にて、分部侯の領地の百姓なり。王陽明流の學者な

橘 南谿
本名宮川春暉
伊勢國の人、
醫を業として

りしが、その德行近時の學者の及ぶ所にあらずとぞ思はる。先年余聞きし事あり。尾州の一士人、用事ありてこの邊

を過ぎ、先生の墓所小川村に有り

と聞きて、畑うつ農夫に尋ねしに、
「畑道なれば知れ申すまじ。案内して奉らん。」とて、先に立ちて行く。程なく小さき藁屋に至り、「しばし



中江藤樹

待たせ給へ。」とて、内に入る。やがて出づるを見るに、木綿の新しきひとへ物に布の小紋の羽織を着たり。彼の士人驚きて、さて、「丁寧なる男かな、墓だに教へ得さすれば、満足

京都に住む、
海内を漫遊
す、文化三年
歿、年五十三。
先生
中江藤樹、近
江聖人と稱せ
らる、慶安元
年歿、年四十
一。
江州大溝、
滋賀縣高島郡
大溝町。

なるにと思ひもて行くうち、墓所にいたりぬ。かの農夫竹垣の戸を開き、「いざ入りて拜し給へ」といひて、その身は戶外に拜伏せり。士人大いに驚き、さては衣服を改め着せしは、我が爲にはあらで、先生を敬するにありけりと心づき、さても汝は藤樹の家來筋の者にてやある。」と問へば、「さに候はず。されどこの村の者は、一人として先生の御恩を蒙らざるは無し。『親をうやまひ、子を慈しむことをわきまへ知りたるは、先生の御蔭なれば、必ずおろそかに思ふべからず。』と、我が父母も常に教へ候ひぬ。」と語る。士人も始めは只なほざりに一見の心にで來たりしが、この農夫の様子を見聞するに、今更に心もあらたまり、懇ろに拜して歸りぬとなり。

なほざりに

墨跡

里方

その後、余肥後にて村井某に親しく交りしに、この人或日外より歸り語りしは、「さて今日珍らしき墨跡を見たり。この國の家老何某の方へ、近き頃江州より來たりし壻養子有り。その方へ用事あり、行きて物語の序に、ふと思ひ出でて、『その御里方の御領分に中江藤樹といひし人ありし由、御存知にもや。その手跡などは所持したまはずや。』と語り出でしに、彼の人座を改め、『藤樹先生の御事は、我が父祖以來尊敬いたし候うて、老父我を愛するのあまり、御方へかく參るについて、かねて祕藏の一軸を出して得させぬ。御所望ならば見せ申すべし。』とて奥に入り禮服に改め、一軸を携へ出でて床にかけ、遙かに引きさがりて拜せられぬ。その尊

敬ひ

敬かくばかりなれば、我も手あらひ口そ、きなどして、拜してやみぬ。分部侯にありては畢竟領地の一農夫なるを、かくまで敬せらるゝこと、代々賢を愛し、徳を敬ひ給ふことも有難く、又藤樹先生の眞の大儒なることも、はじめて知りぬ。と申されき。

熊澤先生
熊澤蕃山、備前侯池田光政に仕ふ、元祿四年歿、年七十三。
河原市
滋賀縣高島郡新儀村大字河原市。
榎木の宿
滋賀縣滋賀郡和邇村大字榎。

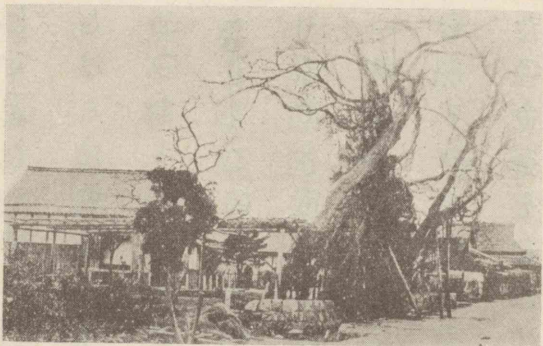
熊澤先生はその門人なり。この人藤樹先生に従はれし始を尋ぬるに、その頃加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ登るに、江州河原市より輕尻の馬をやとひ、榎木の宿に泊る。馬方は河原市へ歸り、馬を洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。とりあげて見れば、金二百兩あり。馬方大いに驚き、今の飛脚のとり忘れたるにこそと

よみがへる

思へば、その儘榎木に走り行き、飛脚の泊れる宿に至り、對面して委しく尋ね問ふに、相違無ければ、その金を取出して返しけるに、飛脚は死にたる者のよみがへりたる心地して、悦びのあまり、行李より別の金子十五兩を取出して、馬方に與へ、「もしこの二百兩なくば、我が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に至らん。さればそこの高恩中々言葉のいひつくすべきにあらねども、先づ當座の御禮までに贈り奉る。」と涙を流して悦ぶに、馬方大いに驚きし顔色にて、そなたの金をそなたに取納めたまふに、何の禮をいふことあるべき。とて、手にだに取らず。いろくゝにいへども、さらに受けずして歸らんとする故、やむことを得ず、十兩とへらし、五

いねがたし

鳥目



藤古と院書樹藤

兩となし、三兩となし、段々とへらして、つひには金二歩となし、せめてこればかりは我が心の悦びなれば、受け給ふべし。さなくては、我が心もすみ申さず。今宵もいねがたし。」と理をつくし、詞をつくしていふにぞ、「この金を受け申す程ならば、二百兩をも留め置き申すべし。かくかへし申すからには、聊かにても謝禮を受くるは、我が心にあらず。さりとして餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文をたまはるべし。これは今夜やすむべき所を、これまで追ひかけ來たれる賃金なり。」

これは我が取るべき錢なれば、申し請くべし。」といひて、二百文を受けて歸らんとす。

飛脚も感に堪へかね、さるにても、そこはいかなる人にておはす。」と問ふに、「名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。只我が在所の近所に、小川村といふ所あり。この村に與右衛門といふ人おはして、夜ごとに講釋といふことあり。某も折ふし行きて聞き侍りしに、『親には孝をつくすべし。主人は大切にするものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず。』などいふこと常々語り給ふにより、今日の金子も我が物にあざれば、取るべき理無しと心得しまでのことなり。」といひて歸りぬ。

講釋

無理非道

くはしく

飛脚はそれより京へのぼり、いつもの宿に到り、さてもこの度は辛き命生きのびて、おのゝ方にも對面することなりぬ。とて、有りし次第をくはしく語るに、折ふしその家の裏に熊澤治郎八田舎よりのぼり居て、學問修行最中の事なりしが、この物語を聞きて、その人こそ誠の儒といふものなれ。とて、その翌日すぐに江州に到り、小川村を尋ねて隨從を願はれしに、「人に教へ申すべきほどの學徳なし。」とて、さらに隨從をゆるし給はず。熊澤ひたすらに願ひて、二日が間藤樹の門にたゞずみて歸らず。藤樹の老母これを氣の毒がり、「よしや先づ内へ入れ申せよ。」とありし故、いなみがたくて内へ入れ、つひに師弟の約をせられしよしなり。その後藤樹

隨從

いなむ

を備前より招き給ひしに、その身は病身なりとて堅く辭し「門人熊澤といふもの有り、御役にも立つべき者なり。」とて、熊澤を出されけり。

いづれも格別の事どもなり。藤樹先生の事跡くはしく知らぬ人も多ければ、見聞き及ぶ所を書きつけぬ。「東遊記」

二一 高山植物の趣味

小川未明

野の草もなか／＼にあはれ深いものですけれど、高山植物に至つては、また別種な趣があります。

蟲の音繁く、月の光幽かに、露深い風情はむしろ麓にあつて、高い山には少ない。然し、岩石峨々として、霧が深く夏も

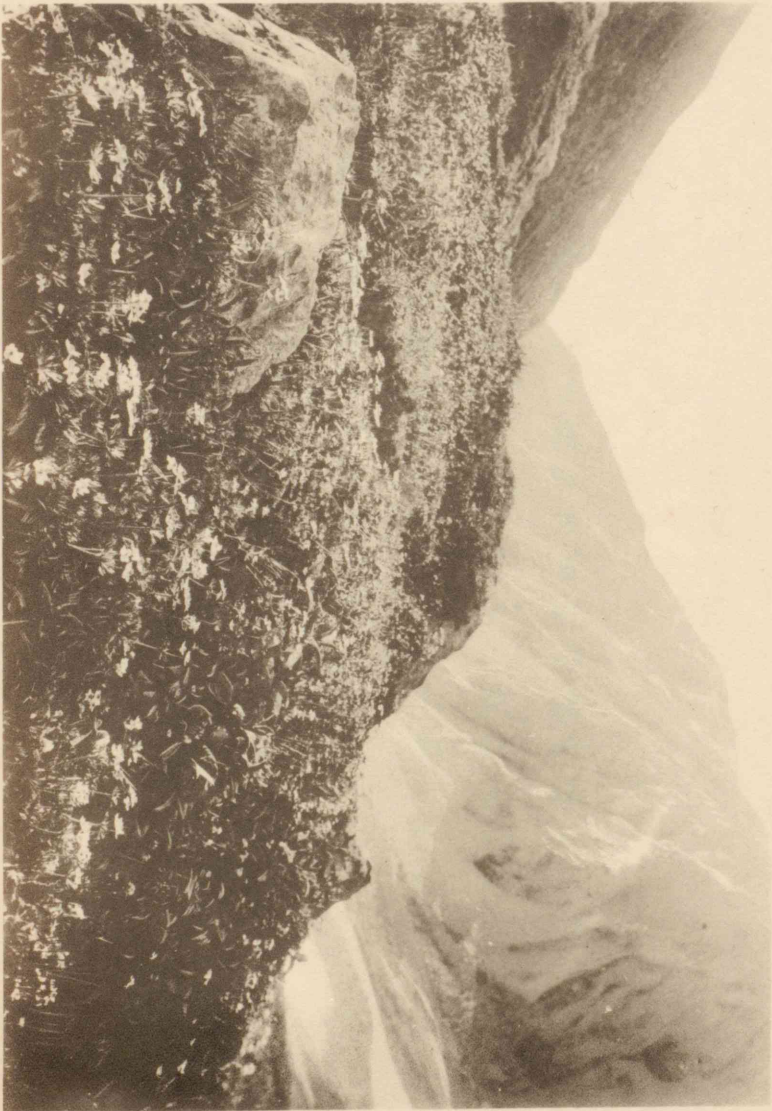
小川未明
名は健作、新潟縣の人、文學者、明治十五年生。
あはれ
峨々

へがし

山で、嶺には僅かに青い空が覗かれ、白い雲が去來してゐるのが見えます。その濕つた路の兩側に、木の根に、この小さな赤い實がついてゐました。思つても懐かしい限りです。その他いろいろの高山植物がありますが、皆その土地の形勢によつて姿を異にしてゐます。高山の頂上と、中腹と、また谷間に生ずるものとは、皆形を異にしてゐますから、その形を見て生えてゐる場所を察する事が出来ます。

だから、寄せ集めものよりは、へがしといつて、そのまゝ地面から剥いで來たものを見るのが、いかにも眞にその自然を味ふことが出来るのであります。

露臺に立つて、無窮に深碧の夜の空を仰ぐと、誰しも星辰



白鳥御の花畑

ないでせう。

長窮

人跡未踏

の輝きに、一つ一つ思ひを潜めないものはないでせう。人生の須臾にして、天地の長窮を感じないものはないだらうと思ひます。

高山植物を愛好するの心は、やはり人跡未踏の高山憧憬に基因するのであります。高い山にあつては、もつと近くこの草は星の光を受ける筈です。そして日夜烈風に吹かれて、霧を吸つて育つて來ました。私はその奇しく運命づけられた草の姿を憐むのであります。

支那の古い鉢に高山植物を移して、夏雲の不思議な形に亂れた日に、それを眺める心は、獨りこの趣味を解した人でなければ、知らないところでは、壺を愛する心持と、草を愛

する心持とは、長く私の心を捕へてゐます。私はこゝにも
藝術を見出し得るものであります。
—「中央公論」—

二二 夏祭の意義

祇園祭
官幣大社八坂
神社の祭禮、
六月十五日、
官祭、七月十
七日、同二十
四日私祭。
据ゑ。

京洛の夏に誇る祇園祭は、例年の通り十六日宵宮で、四條
大路のあちこちに、萬燈の灯に飾られた山鉦が打水に淨め
られた街の上に据ゑられた。祭を迎へる町の家は、水色に
家の定紋染めぬいた幕を張廻し、高張吊して、金屏風の蔭に、
碁盤將棋盤の取りちらされた風情、まさにお祭氣分である。
翌十七日の山鉦巡行は一段の觀物である。四條通は廣く
て美しい。街路樹に沿うて、ゆるやかに曳かれる鉦は電柱

屋形
天神祭
大阪府社天満
宮、七月二十
五日祭禮。
堂島川
大阪市内を貫
流する淀川の
分流。
神田祭
東京府社神田
神社、九月十
五日祭禮。
山王祭
官幣大社日枝
神社、六月十
五日祭禮。
生國魂祭
官幣大社生國
魂神社、九月
九日祭禮。
葵祭
官幣大社賀茂
神社祭禮、祭
日古來四月十
五日、四月十
七日、明治十
七年に五月十
五日と改む。

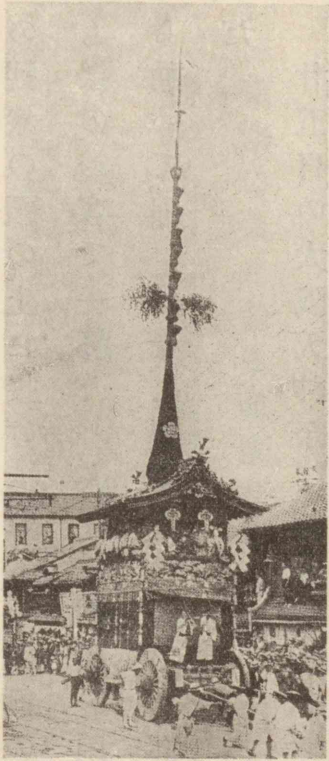
より高い。美しい幕ひき廻した屋形に陣取る祇園囃の囃
し子のざわめき、稚兒はみめ麗しく、警護の麻上下も時代め
く。屋形の中から、不意に茅卷の一束二束ばら〜と、街頭
の觀衆の頭の上に投げられる。兩側の町家は、階上も階下
も祭のお客で一杯だ。人々の團扇と扇子が一齊にひらひ
ら動いて、強い陽光に映ずる。凡ては都會らしい美の動き
だ。

廿五日の大阪天神祭は、御神體、船で御渡りて、堂島川を下
る華麗な船行列に日本三大祭の名がある。
東京の神田祭、山王祭、大阪では天神祭の外に生國魂祭、京
には葵祭、時代祭、長崎のお諏訪祭、紀州の和歌祭等、凡そ大小

時代祭
官幣大社平安
神宮、四月十
五日祭禮。
お諏訪祭
國幣中社諏訪
神社、十月八
日祭禮。
和歌祭
和歌浦、玉津
島神社祭禮。

ビール
Beer.

神宮神社に祭禮のないものはなく、祭禮に、旗のぼり押立て、
地車・山・屋臺を曳廻して打興ぜぬはない。
三伏の暑さに、えい／＼聲して狂ひ廻ることの愚を笑ふ



祇園祭の山鉾

なものも近頃數多
い。近代教育を
受けた青年達は、
西洋の文學や藝
術に憧れて、こん
な古風な民衆的悅樂を白眼視するであらう。或人は日盛
りの四條大路に祇園祭を見るより、鴨川べりの床の上に冷
たいビールビ*ルの杯を傾ける涼味を採るといふ。暑い時は、緑

蔭靜かに涼風を入れるが、自然で衛生的だと説く。こんな
人達には、夏の午後陽炎立昇る中に亂舞する孔雀の舞の美
が解せられまい。我等はたゞ祭禮に打興する無數の民衆
を眺めて、祭禮の意義を認めたいのである。

申すまでもなく、祭禮は神様に對する禮儀である。社會
は禮儀あつて、秩序の基礎を得る。長者尊信の風を失つて
は、世の中は闇だ。神社に祀られる神々は長者である。神
社は日本特有の制度で、必ずしも宗教的意義を持つもので
ない。神々は曾て我等の祖先として、社會に生きて活動し
給うた人格である。或は民族の遠祖たり、或は國家の功臣
たり、或は氏の長者たりし實在の人格である。この人格を

友好團體

神と尊崇して拂ふ禮儀が祭禮であるのだ。

尊崇者の範圍が氏子の範圍である。故に氏子は社會内に一友好團體を組織し、神社を中心として一團の小社會をなし、こゝに一箇の社會組織の綱の目を結ぶ。友好感情は共同祭祀のお祭に於て高調に達し、相携へて神輿をかき、地車を護り、幟を風に吹かせる時、親和の感情に自づからひたる。お祭騒ぎといつてこれを斥けても、この社會内の融和の感情は棄てられまい。

交叉

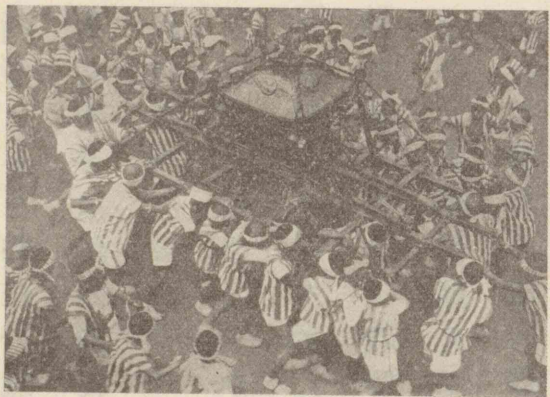
今は、昔のやうな氏子團體は無くなつた。何々社氏子といふも、現代は一つ氏神に護られる友好團體では無い。世の中の利害關係が錯雜して、社會内の團結は幾交叉し、ため

弛緩

に神社中心の氏子關係の如き結合は大いに弛緩した。ただ祭禮の日に、昔の名残のお祭に打興ずるとき、友好融和の

感情自づから湧出て、その昔の近親團體の面影を見る事が出来る。

この再現された友好關係の、社會生活に及ぼす影響を考へて見るがよい。單に衛生とか表面上の風紀とかの理由で、この尊い社會的收穫を捨てうるか。それに衛生にしても、風紀にしても、お祭騒ぎが特に悪



社會的收穫

思へ。

影響を持つとは思へない。日盛りにわつしよいわつしよ

いと神輿擔ぐが、何故日かけてビールをあふるより非衛生的なのか。紊れた風紀が祭禮に際會して時に現れる事もあらうが、風紀が紊れてさへ居なければ、祭禮も嚴肅に行はれる道理だ。

社會多數の人士が共通の感情に相融合することは、社會の安寧福祉のために極めて望ましいことだ。昔はその機關が多かつた。我等は今に面影を残す昔の名残を捨てえない。お祭、盆踊、凡て大衆一齊に同一感情の高調に達しえられる慣習は、寧ろ獎勵したい。融和が社會統一の基礎だ。感情の分離が社會分離の始である。

「大阪毎日新聞」

福祉

二三 この心

鹽井雨江

鹽井雨江、兵庫縣の人、名は正男、國文學者、奈良女子高等師範學校教授、大正二年歿、年四十五。

一日舟行、品川灣頭の釣魚に日を暮し、無月の秋夜、風露をのせて茗溪を溯る。蟲聲ものあはれなる崖下、浪靜かなる所を求めて、つなぎたる一艘の小舟あり。幽かなれども、燈火のかげの苫を洩れて見ゆるは、こゝを大廈高樓の家族ありと覺ゆ。さしのぞけば、僅かに膝を容れたる三人四人がとり圍みたる小さき火桶、外には飯櫃一つ。また物もあらず。あるべき餘地ももとよりあらざるなり。その狭く物かげもなき苫やの中、やゝ高きところに、小さき棚やうの物は造られたり。載せたるものは何ぞ。小さき位牌のかざ

位牌

られたる、右にさゝやかなる手むけの花、左に細々ともし
たる燈明。形ばかりなれど、まつる志は見えたる佛壇。祖
先を尊ぶ大和民族のこの心がけをば、かゝる所にて見るこ
と、まことにゆかしからずや。

—「雨江全集」丁

二四 村の于蘭盆

尾崎喜八

尾崎喜八、
東京市の人、
詩人、明治二
十五年生。

七月は竹の林の新緑の月、
七月は村から村、森から森へと、
ひぐらしがその銀笛の音をかなでる月、
そして七月は善いたましひの精靈しやうりやうさまが、
そのなつかしい家々を訪れる于蘭盆の月。

カンテラ
オランダ語
Kandelaar.
の轉訛。
草市

殊勝

村の辻の小川のへり、
そこから高い樺竝木のはじまるところ
*カンテラの眞赤な焰が油煙にまじつて、
さゝやかな青い草市が立つ。
竹や木の葉で作った佛壇のかざり、
麻殻に蓮の葉と蕾、
茄子にまくはうりに、ほゞづきに、水蜜桃。
人の世のあはれと慈しみとが、
寂しい村に殊勝な賑はひの夜露をふらす時、
深い天には銀河が斜に横たはる。

木の間からちら／＼洩れるお迎へ火
佛壇の燈明ばかり明るい母家いへをうしろに、
そのゆるゆる火影に照らしだされた、
單純で、善良な、
古い農家の家族の顔。
向うには路の角に樅の大木が立ち、
その下の地藏堂にはしろ／＼と蠟燭がともり、
桃色の涎かけした地藏尊の前へべたりと坐つて、
村の老婆が鉦をたゝいて念佛を稱へてゐる。

づたひ

禁斷

束になつた線香の息もつまるやうな煙や、
水いろのほのぐろい盆提灯が風に揺れる、
小川づたひに、
暗い笹藪をうごかして來た風に。
十五、十六の楽しい二日、
畑には農夫の影も見えない、
畑には閑散に雀のむれが散つてゐる。
お針も休み、洗濯も休み、殺生ころしは禁斷、
蟬の歌が木立を縫ふ村のいたるところを、

若者や娘たちの明るい浴衣がゆききする、
そして無人な家の内には年寄りが居残り、
風鈴の鳴る閑静な縁側で茶呑み話をやつてゐる。

さて夜は、

方々で子供の上げる花火の音、

都に遠い田舎の清新な粗朴なよろこび、

ばあつと照らし出す^{*}マグネシウム、

木立の上に開く綺麗な青玉赤玉。

かくてやがて、

粗朴

マグネシウム

Magnesium.

なごりの惜しまれる送り火も灰となれば、
于蘭盆最後の夜は静かに更けわたつて、
田舎はかゝやく星空と、
秋を呼ぶ蟲の聲ばかりの世界となる。

—「高層雲の下」—

二五 蜀山人の盆燈籠

饗庭 篁 村

文化元年の頃とかや、小石川陸尺町（*ろくしやう）に庄助と呼ぶ男住め
り。日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二
日の朝、小石川壽經寺（*しゆけい）の門前に立つ草市へ、行燈といふもの
を持ちゆきて賣りけるに、如何にしけん、買ふ者更に無く、賣
れしは僅か十ばかり、残りしが多ければ、力を落し、情なき顔

饗庭篁村
名は與三郎、
東京市の人、
文學者、大正
十一年歿、年
六十八。
陸尺町
傳通院の前、
今の大門町。
壽經寺
傳通院。

大田南畝
名は覃、蜀山人と號す、江戸の人、文學者、文政六年歿、年七十五。

神樂坂
東京市牛込區にあり。

かこつ



大田南畝

してかつぎ歸りけり。
途中にて日頃出入る大田南畝翁の許に立ちよりて、臺所の者に、「諸々困る事かな。この盆は如何にして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ残り候。この分にては明朝神樂坂（かぐらざか）の市（いち）に持行き候とも、また今朝の如くならべし。もとより手細工にせし事にはあれど、聊か資本もかゝりたり。この分にては水も飲まれ申さず」とかこちけり。
南畝翁は座敷にてこれを聞かれ、手に持つ杯を下に置き、彼の聲は庄助にあらずや」と問はるゝにぞ、傍の者斯様斯

替へ。

狂歌

様にて、「又彼の泣き男がかこち申し候。」と言ひければ、翁は臺所に出られ、「諸も氣の毒なる事よ。颯の下が乾きては難儀ならん。我が言ふ如くせば、少しは賣るゝ事もあるべし。」と言はれければ、「それは有難き事に候。如何に致すべき。」と、翁の顔を如何にも有難げに仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出し、「これにてその燈籠を張替へよ。何か書きてやらん。」と言はる。悦びて立歸りしが、忽ちに百あまり張替へて持來れば、翁は例の草書にて狂歌やら發句やらなくり書きて渡されけり。庄助は頭を搔きつゝ、一禮を述べて、荷ひ歸る途々、蓮の花を紅入りにて畫いてさへ賣れぬに、如何に先生なればとて、かゝるむだ書の反故張にては買ふ人はあ

るまじ。さりながらあれ程に仰せられし事なれば、先づ明朝、神樂坂の市に持行き、賣れ残りたらば、その事を申して歎きつき、二百疋も借りて外商ひの元手にせん。」と、工面顔にて足も重く二三町歩む向うより、侍一人來かゝりしが、供の者に言ひつけて、「その燈籠は賣り物か。」と問ふ。儲はと悦び、「如何にも賣り物に候。やうく傳つたを求めて先生に書いて貰ひ申したるにて、心あても有りて拵へ候なれども、これ程は入り申さず候。お望ならば差上げ申さん。」と言ふに、「價は如何程ぞ。」と問ふ。幾許と言ひてよき事やら、庄助はたと詰りしが、思ひ切つて五十文と言ふ。「その直にて二つくれよ。」と、百文渡して買行きたり。又あとより通り掛りし人、それ賣

買ひ。

寢惚様
蜀山人の戯
號。
手傳ひ。

るならば買ひたし。」と言ふ。今度は息一杯に吹きて、六十四文と言ふに、言ふがまゝに又買行きたり。あとより又此方へも二つ、我にも一つと、己が家に歸るまでに二十ばかりも賣れて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、かくと女房に話せば、「誠に寢惚ねぼけ様は生佛様なり。有難き事なり。明日は早くより持出で給へ。私も参りて手傳ひ申さん。一人にては手も足るまじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。」と女房は言ふ。

夫婦は翌朝早起して神樂坂に到り、竝ぶる間も無く、蜀山人の書いたる燈籠とは珍らし。」と、一人停りて價を問ふ。庄助思ひ切つて百文と言へば、「さもあるべきぞ。」とて買行く。

女房夫の袖を引ききて、「百にても直切らず、買つて行かるゝかは、二百文といふとも賣れ申さん。二百文と言ひ給へ。」と智慧を付くるに、庄助手を振りて、「二百は餘り高かるべし、さらば百五十文。」と言ふ。それより百五十文にて六七十を賣り、遂には先見明らかなるその妻の言の如く、「二百文より一文も引かず。」と肩を怒らし、まだ五つ半にもならぬに賣れられたり。金にして三兩ばかりになりし故、夫婦はこけつ轉びつ翁の許に到り、亭主をかきのけて女房口を出し、「有難い。」を數千遍述べて、「如何にも先生は生神様なり。」と、今度は神あしらひにしつゝ、悦び歸りきとぞ。

醉餘の戯

翁が醉餘の戯、能く枯骨に膏せりと言ふべし。

「雀躍」

二六 蚊 帳

阿 部 次 郎

阿部次郎
山形縣の人、
哲學者、東北
帝國大學教授、
明治十六年生。

錦繪

視覺
觸覺

情調

蚊帳は艶なもの、悲しいもの、親しみの深い、懐かしいものである。木綿の蚊帳は、あの手觸りのへな〜な所から、あの安つばい褪め易い青色まで、いかにも貧乏らしくて情ないが、麻の蚊帳の、古い錦繪に見るやうな青色や、打ちたての生蕎麥のやうなしやりしやりした手觸りや、紹の蚊帳の軽い滑かな涼しい視覺、觸覺などは、蚊帳そのものの感じが既に夏らしく、爽かな氣分を誘つて來る。更にこれを人事と聯關させると、蚊帳の齎す情調は随分複雑に、豊富になる。

一つ蚊帳の中に寝るといふことは、一つ部屋に寝るとい

魂の呼吸

ふことよりも遙かに對手との親しみを深くする。久しぶりに逢つた友達でも、廣い部屋に離れ離れに寝るよりは、小さい蚊帳の中に枕を並べて、寝苦しい一夜をあかした方が、どれくらゐ思ひ出の色が濃いことであらう。野と衢とは、人と人との住む處としては、あまりに遽しくあまりに空漠である。人と人との魂の距離を縮めるために、人の家がある。更にその距離を近くするために、人の住む部屋がある。人の住む部屋の中に一區を劃して、人と人との魂の呼吸を最も親密に相通はせるものは、夏の夜の蚊帳である。

私は田舎で育つた。田舎では大抵の家に土藏があつて、蚊帳などは秋の初から翌年の夏が来るまで土藏の隅に押

豫感

うそ寒さ

込められてゐる。下水の子こ子かがそろ／＼蚊になり出す頃に、祖母はきつと土藏に蚊帳を出しに行つた。根附のやうに、祖母の後を追廻してゐた私は、よく土藏の中について行つたものであつた。土藏の二階の薄暗い隅から、幽かに呻りながら飛出す二三の晝蚊の羽音と、一年目に日の目を見る蚊帳の古臭い匂とは、私の幼い頭にどんなに入梅の豫感を刻み込んだことであらう。今でも入梅を思ふと、あの音とあの匂とが、微かに浮んで来る。

秋になつて蚊帳を釣らなくなつた晩の、廣さ、淋しさ、うそ寒さも忘れることが出来ない。北の國では、蚊帳の釣手だけ残る頃には、もう機織蟲が壁に鳴く。細めた洋燈の光を

暗く浴びながら、蒲團の中に秋らしく小さくくるまつて、機織蟲の歌を聽いて寝た頃の心持は、今だにあり／＼と意識の奥に浮んで来る。

—三太郎の日記—

二七 日本語の戀しさ

島崎藤村

島崎藤村
名は春樹、長野縣の人、文學者、明治五年生。
兼好法師
俗姓卜部、京都吉田神社の祠官、後宇多上皇に仕へ、後出家す、正平五年寂、年六十八。

兼好法師曰く、「おぼしきこといはぬは腹ふくるゝわざなれば云々」と。世を避け山に遁れた昔の修道者が、かうした沈黙の嘆きを發して居るのはいぢらしい。食事をするにも外國の言葉、買物をするにも外國の言葉、といふやうな土地へ參つて、子供の時分から用ゐる慣れた言葉で、思ふさま物が言へない場合には、私どもは又別な意味で腹のふくれる

おぼしきこと云々

徒然草第十段に見ゆ。懷郷病

嗅ぐ

エトランゼ
Etranger.
フランス語、外國人の意。

心地が致します。當地の大使館員の話に、私どもは懷郷病といふものを知りません。何故かといふに、私どもは館員同志朝晩のやうに顔をあはせて、日本に居ると同じやうに話が出来ますから」と申しました。實際あの風通しの好い室で、青々とした疊の上に横になつて見たいといふことや、好きな味噌汁の香を嗅ぎたいといふことにも勝つて、日本の言葉が戀しく思はれます。かうして外國で同胞に廻り合つて、國の言葉を話す時の樂しさを思つて見て下さい。この通信を書き、時々旅のお話をするといふことだけでも、何程私がエトランゼエとしての沈黙から紛れて居るかを思つて見て下さい。

—佛蘭西だより—

二八 紫蘇の實

長塚節

長塚節
茨城縣の人、
歌人、小説家、
大正四年歿、
年三十七。

萌え
ほどろに

白はにの瓶こ
そよけれ霧な
がら朝はつめ
たき水くみに
けり 節

がらす戸の中にうち臥す君のため草萌えいつ
る春を喜ぶ 竹の里人を訪ふ
たらの芽のほどろに春のたけ行けば今さらさ
らに都し思ほゆ



蹟筆 節塚長

水うてば青酸漿の袋にも滴りぬらんたそがれ
にけり

匂へる

こゝろよき刺身の皿の紫蘇の實に秋はにはか
に冷えいでにけり
落栗は一つもうれし思はぬにあまたもあれば
なほさらにうれし
炭がまを焚きつけ居れば赤き芽の柘榴のうれ
にいり日さしくも
はろくに匂へる秋の草原を浪の偃ふこと霧
せまりくも
生きも死にも天のまにくと平けく思ひたり
しは常の時なりき

「長塚節全集」

二九 ターヘルリアナトミア 菊池 寛

菊池 寛 高松市の人、文學者、明治二十二年生。
 前野良澤 中津藩の蘭醫、享保三年歿、年八十一。
 杉田玄白 小濱藩の蘭醫、文化十四年歿、年八十四。
 中川淳庵 小濱藩の醫、天明六年歿、年四十八。
 小杉玄適 小濱藩の醫、寛政三年歿、年六十二。
 ターヘルリアナトミア
 Tabulae Anatomicae
 オランダ語、和譯「解體新書」。

明和八年三月四日、江戸千住小塚原の刑場で、罪人の腑分があつた。その時、前野良澤、杉田玄白、中川淳庵、小杉玄適の四人もまたそれを見に行つた。愈、腑分が始まると、四人は辛うじて手に入れた和蘭の醫書ターヘルリアナトミアと死體とを對照し、精密に調べて、その書の甚だ精確なることを知つた。歸途、感極つて遂にこの書を翻譯しようとの意見が、期せずして四人の間に一致した。就いては善は急げ、明日よりその研究を始めようと互に約して、それ〴〵家路についた。

約の如く、その翌日を始とし、四人は平河町の良澤の家に月五六回づつ相會した。

章句語脈



前野良澤自畫像

良澤を除いた三人は、和蘭文字二十五字さへ、最初は定かには覺えて居なかつた。良澤は三人の人々に蘭語の手ほどきをした。彼はさすがに長崎へ留學したことがあるだけに、多少の蘭語と、章句語脈のことも、少しは心得て居たけれども、それも殆ど言ふに足りなかつた。一月ばかり経つと、良澤が三人に教へることは、もう何も残つて居なかつた。三人の手ほどきが濟むと、四人は始めてターヘルリアナト

艣舵

茫洋

ミアの書に向つた。
が、開卷第一の頁から、たゞ艣舵無き船の大洋に乗出した如く、茫洋として何處からも手の附けやうもなく、あきれて居る外はなかつた。

内景

が、二三枚めくつた處に、仰向けにした人體全象の圖があつた。彼等は考へた、人體内景の事は知り難いが、表部外象の事は、その名所も一々知つて居ることであるから、圖に於ける符號と説明の中の符號とを合せて考へることが、一番取りつき易いことだと思つた。

彼等は、眉・口・唇・耳・腹・股・踵などに附いて居る符號を文章の中に探した。そして眉・口・唇などの言葉を一つ一つ覺えて

行つた。が、さうした單語だけは分つても、前後の文句は彼等の乏しい力では一向に解し兼ねた。

一句一章を、春の長さ一日考へあかしても、彷彿としてあきらめられないことが屢あつた。四人が二日の間、考へぬいてやつと解いたのは、「眉とは目の上に生じたる毛なり。」といふ一句だつたりした。四人はそのたわいもない文句に哄笑しながらも、銘々嬉し涙が眼の裡ににじんで來るのを感じずには居られなかつた。

眉から目と下つて、鼻の處へ來たときに、四人は、「鼻とはフルヘツヘンドせるものなり。」といふ一句につき當つてしまつて居た。

たわい

譯註

巳の刻

申の刻

無論完全な辭書は無かつた。たゞ良澤が長崎から持ち歸つた小冊にフルヘツヘンドの譯註があつた。それは、木の枝を斷ちたる跡、その跡フルヘツヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土聚りてフルヘツヘ



白 玄 田 杉

ンドをなす。といふ文句だつた。四人はその譯註を引合せても、容易には解しかねた。

「フルヘツヘンド、フルヘツヘンド。」四人は折々その言葉を口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へぬいた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにして、その膝頭を叩いた。

癒え。

連城の壁

「解せ申した、解せ申した。方々、斯様で御座る。木の枝を斷り申したる跡、癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土聚れば、それも堆くなるで御座らう。されば、鼻は面中に在りて堆起するもので御座れば、フルヘツヘンドは堆しといふことで御座らうぞ。」と言つた。

四人は手を拍つて喜び合つた。玄白の眼には涙が光つた。彼の喜は連城の壁を獲たよりも勝つて居た。

彼等は最初難解の言葉に接する毎に、丸に十文字を引いて印とした。それを轡十文字と呼んで居た。初め一年の間、どの頁にも、どの頁にも、轡十文字が無數に散在した。

が、彼等の先驅者としての勇猛精進は、凡てを征服せず

殖え。

は居なかつた。一箇月六七回の定日を怠りなく守つた甲斐はあつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、章句の脈も明らかに、書中の轡十文字は、残り少なく搔消されて居た。

酬い。

先驅者としての苦闘は、やがて先驅者のみが知る喜で酬いられて居た。語句の末が明らかになるに従つて、次第に甘蔗を噉ふが如く、その中に含まれた先人未知の眞理の甘味が、彼等の心に浸みついて居た。

沃土

彼等は、邦人未到の學問の沃土に、彼等のみ足を踏入れうる喜で、會集の期日毎に、兒女子の祭見に行く心地で、夜の明るくるを待ちかねるほどになつて居た。

「蘭學事始」

三〇 七株松

落合直文

落合直文
萩之家と號す、宮城縣の人、國文學者、明治三十六年歿、年四十三。

七株松とは、おのが故郷の家の庭前に、父君の植ゑ給へる松なり。植ゑ給ひし年月は明治十五年の冬、霜雪降りこほる時なりけり。そのをり一封の書を寄せ給へり。その中に、「汝等兄弟どものよはひを祝ひて、七株松を植ゑたり。この松の變らぬが如く、よく霜雪にたへて、學びの道を勵み勉めよ。」とあり。他の兄弟は知らず、おのれは深く肝に銘じて、一日も忘れしことあらず。

おのが兄弟は七人なり。上には姉と兄とおのゝ一人、下には弟三人と妹一人とあり。姉一人は家にて育ちしか

おのが
おのゝ

わづらひ

ど、他は皆里子となりて人の手にて育ちたり。父君はさまで心にとめ給はざりしかど、母君はいかにしてこの數多の兄弟を教育せんと、常に案じわづらひ給ひたりとか。兄弟の多きは兄弟そのもののためにはいふべからざる幸福なれど、親の身にとりてはこれより心づくしなるものはなからん。

七株松は七人の兄弟にちなみて、植ゑ給へるものなり。

その松は七株とも一ところに生ひたれど、われ／＼兄弟は未だ曾て一堂のもとに會したることなし。おのれ松岩＊にありし頃は、二人の弟と妹とは里にあり。おのれ仙臺＊にありし頃は、姉と兄とは松岩＊にあり。兄來たる時は弟去り、妹

松岩
宮城縣本吉郡
松岩村。

去る時は姉來たるなど、あるは二人、あるは三人、多き時も四人より多かりしことはなかりしなり。殊におのれは早くより都に上りしかば、兄弟團欒といふ快樂を得ること最も

少なかりしなり。



落合直文

愛情といふものは常に逢ふものの爲には薄く、別れがちなるもの爲には切なるものなり。おのれら兄弟は常に離隔し、たまた

ま逢ふも、またすぐ別るゝを例とせり。故に兄弟の愛情の切なる、蓋し世の人々の夢にも想ひ及ばざるところならん。父の病み給ひし大晦の夜、兄弟＊六人うちあつまり、舊臣中

逢ふ。

兄弟六人
妹一人は先年
故人となれる
なり。

より旗卷の役に供せるものを呼出でて、當時の戦況などを語らす。床の間に飾れる甲冑・太刀などを指して、父君の奮戦し給ひし状を述ぶるに、膝の進むも覺えず。かの失せにし妹は、父君の傳記をかく詳らかに聞きたることなからん。今年もはや今宵かぎりなり。都のことども心にかゝること多かりしかば、明日出でたゝんと、その旨父君に請ひしに、「わが病は心づかひすな。はや歸れ。」とのたまふ。おのれ兄弟中最もおくれて來たれり。さるにまた最も早く立去らんとす。他の兄弟に對して面目なしなどいふことは、他人に對して起る心なり。おのれより先に來たりし兄弟、おのれより後まで残らん兄弟、その兄弟はおのが心には妬ま

請ひ。

おくれ

妬ましよう。

しうこそ。
 あくる日はやがて元日なり。朝とく起きて見るに、天氣うらゝかに、空にはかゝる雲もなし。いよゝ／＼出でたゝんとするに、父君「汝が首途の祝として、舊臣どもに謠をうたはせん。しばし待て。」とて、兄をしてその用意せさせ給ふ。かくて父君も床のうちに起きさせ給ひ、屠蘇の杯など取らす。杯一めぐりせしに、一人の老臣出でて、「なに仕うまつらん。」といふ。父君「親子の別れなれば、夜討曾我七騎落などよからん。」とのたまふ。おのれ「めでたき別れにはべれば、七騎落の方ねがはし。」といふ。うたふもの三人、やがて笛鼓・太鼓の聲起りぬ。父君病をつとめて立ちて舞ひ給ふ。「契りほどな

首途の祝

夜討曾我
能の曲名、曾我兄弟の仇討を仕組めるもの。

七騎落
能の曲名、源頼朝石橋山に敗れて安房に通る、折のこゝを仕組めるもの。

き早舟を、しばしとだにもいひあへず、跡を見おくりたゝず
めば、はや遠ざかる浦の波、たち別れゆくありさまを。「のここ
ろはあはれともおぼえしが、うれし泣きの涙は、なにかつゝ
まん唐衣、日も夕暮になりたれば、月の杯とりくゝに。「のここ
ろに至り、悦ばしさにたへず、おのれも、「心うれしき酒宴かな。」
とうたひて座を立ちぬ。

坂を下りて、門を出づれば、舊臣どもあまた待ちあたり。
こゝに車に乗らんとて家の方をかへり見するに、庭の七株
松はいづれも千年の色をあらはせり。こはこれおのれら
兄弟のために植ゑ給ひしものなれど、その千年は更に父君
にさゝげまつらん。あはれ父君のかぎりなき御齡は、この

七株松ぞよく知らん。

「秋之家遺稿」

三一 百日紅

格堂

本名赤木龜
一、岡山縣の
人、俳人、明
治十二年生。

川狩の遠き篝や二處

格堂

夏帽や故郷を望む舟の中

同

五月雨に郵便遅し山の宿

虚子

打ち水にしばらく藤の雫かな

同

僧房の閑に飽きけり百日紅

青々

裏口に吹きぬく蚊火の煙かな

同

愕然として晝寢さめたる一人かな

碧梧桐

撫子や海の夜明の草の原

同

碧梧桐

本名河東兼五
郎、愛媛縣の
人、俳人、明
治五年生。

縁先の日よけや桐の花落つる

四方太

夏羽織懷にして戻りけり

同

「春夏秋冬」

三二 春より秋へ

徳富健次郎

一 花月の夜

戸をあくれば、十六日の月櫻の梢に在り。空色淡くして碧霞み、白雲團々、月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如く軟かなり。春星影よりも微かに空に綴る。微茫たる月色花に映じて、密なる枝は月を鎖してほの闇く、疎なる一枝は月にさし出でてほの白く、風情言ひ盡し難し。薄き影と薄

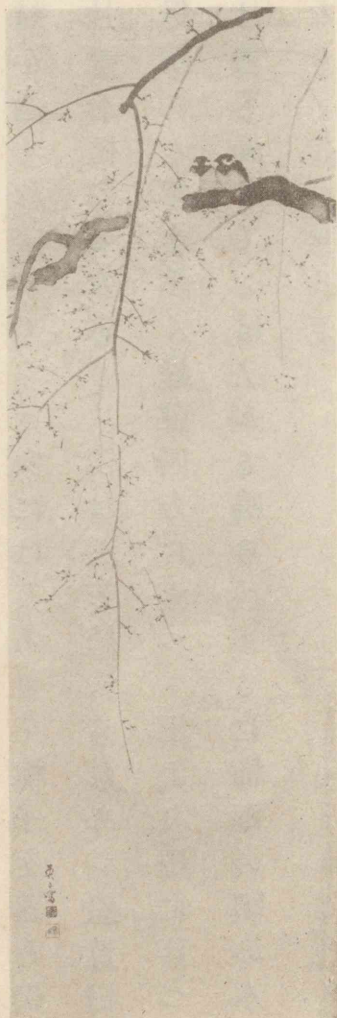
徳富健次郎
蕭花と號す、
熊本縣の人、
文學者、昭和
二年歿、年六
十。
團々

映じて

俚歌

き光は落花點々たる庭に落つ。

濱の方を望めば、砂洲茫々として白し。何處やらに俚歌を唄ふ聲あり。



(筆舟英藤加) 夜 朧

朧

すでにして雨はらくと降り來ぬ。やがてまた止みぬ。春雲月を籠めて、夜ほの白く、櫻花澹として無からんとす。蛙の聲いと静かなり

二 梅雨の頃

雨降りて止み、止みて又降る。鴉聲と蛙聲と交々雨晴を争ふ。雨の絶えまに出でて、麥藁まじりの深泥を踏みつゝ、村を過ぐれば、緑くらき家には、人ありて梅子を落し、畑には甘藷を植うる女あり。田は大方植ゑられぬ。嫩黄田々、秧猶疎にして水多く、蛙聲四方に満つ。田より田に落つる水は音も濁りて、こぼくと鳴る。まさに梅雨の頃の水の聲なり。

梅子

嫩黄田々

漂ひぬ

川は膏の如き碧潮満々として、黄なる麥藁浮き沈みつゝ、漂ひぬ。川邊の蘆稀に穂を抽きたり。其の蘆を折りしいて、鰻、鯊を釣る子供あり。

氣重うして濃やかなり。村より出づる煙の濕りて立ちも上らず、靄となりて這へるを見よ。山の藍深く緑重うして、滴水を落さば、色融けて流れんずるさまを見よ。

山に鼻の聲あり。

雨はらくとまた降りいでぬ。

三 良夜

良夜とは今宵ならん。今宵は陰曆七月十五夜なり。月清く、風涼し。

夜業の筆を擱き、枝折戸あけて、十五六歩邸内を行けば、栗の大木眞黒に茂る邊に出でぬ。其の蔭に潜める井戸あり。涼氣水の如く闇中に浮動す。蟲聲蟋々、時々白銀の雫のぼ

蟋々

清光溶々

たりと墜つるは、誰が水を汲みて去りしにや。
 更に行きて畑の中に佇む。月は今彼方の大竹藪を離れて、清光溶々として上天下地を浸し、身は水中に立つの思あり。星の光何ぞ薄き。氷川の森も淡くして煙と見ゆめり。静かに立ちてあれば、吾が側なる桑の葉、玉蜀黍の葉は、月光を浴びて青光りに光り、棕櫚はさや／＼と月に囁く。蟲の音滋き草を踏めば、月影爪先に散りゆく。露のこぼるゝなり。藪の邊には頻りに鳥の聲す。月の明きに彼等もえ眠らぬなるべし。開けたる所は月光水の如く流れ、樹下は月光青き雨の如くに漏れぬ。歩を返して木蔭を過ぐるに、燈光のかけ木の間を漏れて、人の夜涼に語るあり。

閉ぢて

枝折戸閉ぢて縁に踞する程に、十時も過ぎて、往來全く絶え、月は頭上に來たりぬ。一庭の月影夢よりも美なり。
 月は一庭の樹を照し、樹は一庭の影を落し、影と光と黒白斑々として庭に滿つ。縁に大なる楓の如き影あり。八つ手の落せるなり。月光其の滑かなる葉の面に落ちて、葉はさながら碧玉の扇と照れるが、其の上にもまた黒き斑點ありて、ちら／＼躍れり。李の影の映れるなり。
 月より流るゝ風梢をわたる毎に、一庭の月光と樹影と、相抱いて跳り、白搖ぎ黒さゝめきて、其の中を歩するの身は、これ無熱池の藻の間に遊ぶの魚にあらざるかを疑ふ。

四 秋漸く深し

無熱池
ささめく

收納

野路行けば、粟の收納のさかりにて、稻の收納もぼつ／＼
 始まりぬ。蕎麥雪の如く、甘藷の畑は彌繁りに繁れり。
 百舌鳴く村に、紅なる黄なる星の如く、柿の實の照れるを
 見よ。彼岸花・螢草・野菊・蓼・小さき粟の如き、稻の如き、黍の如
 き、燕麥の如き、八千草に鳴く蟲の音を踏みわけ行けば、蛙飛
 び、はつた蠡斯た飛び、稀には蟹がさ／＼と隠れ行く。
 「自然と人生」

三三 桃山御陵

田山花袋

二つの御陵
 伏見桃山陵、
 伏見桃山東
 陵。
 額づく

桃山の二つの御陵では、いろ／＼なことが考へられる。
 今を以て古を考へるといふことがあるが、實際私は、その前
 に額づく、私たちの見て来たことばかりではなしに、遠い

天武天皇の陵
 奈良縣高市郡
 高市村檜隈大
 内陵。

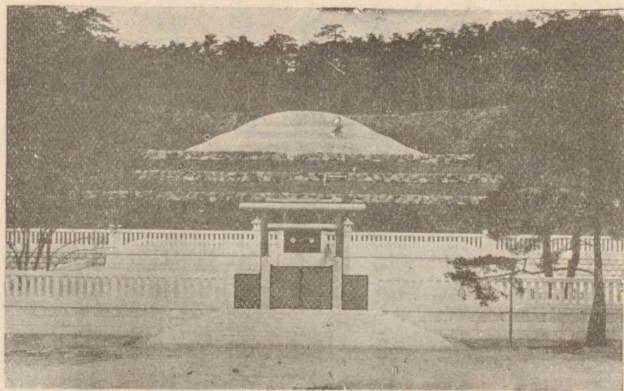
柏原の陵
 桓武天皇の御
 陵、京都府紀
 伊郡堀内村に
 あり。

埋葬

昔のことまでも取集めて考へられずにはゐられないので
 あつた。

私はそこで、天武天皇の陵へ後から持統天皇の陵を合せ
 たことなどを想ひ起した。また柏原の陵に御子の嵯峨天
 皇が涙を流して祈念されたことを想ひ起した。それはそ
 の大小はあつたにしても、昔ほどの天皇でも、皆私たちが見
 て来たと同じやうにして、一つ一つその陵を築かれたばか
 りでなく、その當時の國民の悲嘆をも俱にその中に混ぜて、
 埋葬されたのであつた。であるのに、中世以後はどうなつ
 たであらうか。さうしたことは絶えてしまつて、あの京都
 の東山の南のはづれに近い泉涌寺の中に、微かにその存在

衰へ。



桃山御陵

を示されるだけになつたではないか。そして、元からあつた一つ一つの陵などでも、亡びた國の帝王の陵でもあるかのやうに、全く顧みられずに何世紀かを過したではないか。中には、どれが、どれだか、わからなくなつたやうなものもあつたではないか。つまり、それだけ國が衰へ世が沈んでゐたので、さういふことをして置いてはいけないといふことは、足利時代の將軍も、信長も、秀吉も、家康も、またそれに續いた後繼者も、みんな

驕奢
盲ひて

徒爾

知らないことはなかつたのであらうけれども、或は經營に忙しく、或は戰亂に追はれ、或は自己の驕奢に心も盲ひて、そこまで手を出す餘裕はなかつたのであつた。しかし、長い間の歴史の波は、漸く大きなものを打出して來た。私たちは次第に闇い闇い歴史から、眼もきらめくやうな明るい方へと出て行つた。それを思ふと、維新の時に、山陵の荒廢に着目して、それによつて勤王の志を燃立たせようとしたものもあつたことなども、徒爾には見逃してしまふことのできない事實であつた。

桃山の御陵に參拜するものは、誰かわが大倭の昔を思ひ出さぬものがあらう。千年にして始めてその昔に還され

硬政策

脱却

遭逢

た、その明治天皇の偉きな功業を。自ら戸を閉ぢるやうな卑屈な政治の状態から脱して、飽くまで外へ外へと伸びて行かうとしたその立派な對外の硬政策を。なん等の好運ぞ、私たちは大倭時代よりも、更に一層光輝あり力ある世をありくくと眼の前に見ることができたのである。佛教などに悪くとらはれて、夥しく感傷的になつた社會の空氣から全く脱却して、更に自由に大きく呼吸いづくことができる世に遭逢したのである。私は桃山御陵の前に立つ毎に、いつも雄大な「時」の羽風が耳邊を掠めて通つて行くのを聞きうるやうな心持がした。

「花袋行脚」

三四 御 詞

皇太子殿下
今上天皇。
九月
大正十年。

皇太子殿下九月三日御歸朝ニ付原内閣總理大臣參殿御祝詞ヲ言上シタル處同大臣ニ對シ左ノ通御詞ヲ賜ヒタリ

允許
巡遊

欣感

敦篤
披瀝

予ハ曩ニ 皇上陛下ノ允許ヲ蒙リテ歐洲諸國ヲ巡遊シ幸ニ遠路恙ナク今日歸朝スルヲ得タルハ深ク自ラ喜悅スルト共ニ予ノ外遊ニ關シ朝野ノ表示セル一憂一喜ノ至情ハ予ノ欣感忘レサル所ナリ
予ノ歐洲諸國ヲ歴訪スルヤ諸國ノ元首竝ニ官民ハ均シク眞摯敦篤ナル誠意ヲ披瀝シテ歡待至ラサル所ナク之

歴歴

二因テ短日月間ニ多方面ノ事物ヲ視察スルヲ得タルハ
予ノ幸福トスル所ナルカ歴訪諸國ノ歡待ハ蓋シ予ニ對
スル厚意ノ表現ニ止ラス實ニ我カ國民ニ對スル友情ノ
發露ナリ予ハ此ノ機會ヲ以テ國民ト共ニ深厚ナル感謝
ノ意ヲ表セサル可ラス
斯ノ游往復半歳ニ過キスシテ充分ナル考究ヲ爲スニ暇
アラサリシモ予ハ此ノ間ニ於テ知名ノ政治家竝ニ軍人
學者等ニ接見シテ其ノ談論ヲ聽キ學術文藝產業等發達
ノ狀況ヲ視察シ遂ニ大戰ノ跡ヲ尋ネ慘澹タル光景歴歴
猶存スルヲ目撃シテ彌々世界平和ノ切要ナルヲ感シ戰
時聯合國民カ國難ノ爲ニ發揚セル犠牲ノ精神偉大ナル

孜孜

宏謨

ヲ追想シ更ニ戰後孜孜トシテ文明ノ興隆ニ努力セル氣
象ヲ看取シ感興尤深ク裨益ヲ獲ルコト頗ル多カリキ予
ハ大戰ノ教訓今猶鮮明ナル時機ニ於テ見學ノ目的ヲ遂
ケタルヲ喜フ
惟フニ我ニ國粹ノ精華アリテ固有ノ特長ニ屬ス然レト
モ我國ノ宜ク他邦ニ學フヘキモノモ亦尠カラス予冀ク
ハ國民ト共ニ維新ノ宏謨ニ則リテ今後益奮勵シ彼ノ長
ヲ取リテ我ノ短ヲ補ヒ國運ノ隆昌ヲ期シ世界文化ノ發
展ニ資シテ以テ 皇上陛下ノ聖意ニ副ハムコトヲ

皇太子殿下ハ九月八日東京市ノ奉祝會ニ行啓左ノ通御詞

ヲ賜ヒタリ

予カ前日歸朝ノ際ハ東京市民ノ熱誠ナル歡迎ノ中ニ帝
 都ニ入り欣喜ニ堪ヘサリシカ今特ニ斯ノ場ヲ設ケテ盛
 大ナル祝賀ヲ受クルハ予ノ満足スル所ナリ
 東京市ハ今方ニ都市施設ノ改善ヲ講究スト聞ク予ハ切
 ニ好成绩ヲ得テ市民ノ幸福ト帝都ノ殷盛トヲ増進セム
 コトヲ望ム

殷盛

「官報」

新編國文讀本 新制版 卷三終

昭和六年七月二十日 印刷
 昭和六年七月二十八日 訂正印刷
 昭和六年十月二十九日 訂正發行

編新	國文讀本新制版
定價	自卷一 各金六拾錢
價	至卷十

新編國文讀本新制版



編者 千田 憲

發行者 塚田 六彌

印刷者 岡 功

印刷所 東京市本所區臨橋一丁目廿七番地ノ二
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 右文書院

東京市本鄉區千駄木町
貳百七拾九番地

電話小石川三七二三番
振替東京七四五二八番

大賣捌 東京 林平書店・大阪 柳原書店・名古屋 教生社



子科或年石組

1081

坤甸
東